青森県立郷土館研究紀要 第43号，121-168，2019．3

青森県岩木川下流域におけるサルケ（泥炭）の利用（３）

増田公寧[1)]

Field Studies on Usage of Peat in the Lower Valley of Iwakigawa-River, Tsugaru district, Aomori prefecture, Japan (3)

Kimiyasu MASUTA

Key Words：泥炭，亜炭，低湿地，開拓

1 はじめに

津軽地方の岩木川下流域一帯では、古くから「サルケ」[2)]が利用されてきた。サルケとは、分解が不完全な植物の遺体が堆積したもので、泥炭に相当する[3)]。筆者はこれまで、青森県津軽地方、下北地方、および上北地方における、庶民によるサルケの利用について調べ、報告した(拙稿2015,2016,2017,2018)[4)]。本稿はその続編であり、津軽地方を対象としたものである。

本稿の目的のひとつは、より多くの証言を記録し実態を探ることである。拙稿（2015）では、岩木川下流域の広範囲にわたって俯瞰することに力点を置いたことから、地域間の差異や共通性を垣間見ることはできたが、個々の地域について深く掘り下げることができなかった[5)]。そこで2016年以降は対象地を絞り、より詳細な聞き取りをおこなっている（拙稿2016-2018）。本稿で対象としたのは、つがる市稲垣町繁田、稲垣町穂積である。いずれも、サルケの盛んな利用が予想される地域である。

いまひとつの目的は、証言をもとに、従来の解釈や評価について再検討することである。近年の報告や論考の多くは「サルケは冬季に用いられる燃料」であり、「燃料不足を補うための薪の代用品」であると説明する[6)]。このような解釈や評価は妥当だろうか。筆者はこれまで、津軽地方を含む県内各地で計187名の方から泥炭（サルケ、シギボ）の利用についてお話を伺った[7)]。本稿では今回の調査結果を含め、これらの人びとの声をもとに再考することを目的のひとつとしたい。なお、聞き取りは博物館の公務としてではなく、個人的におこなったものである（2016年11月28日[8)],2018年7月1日,7月15日に実施）。

2 地域概況と研究史

この地域は、かつて古十三湖と呼ばれる大きな潟湖が広がっていた場所で、亀ヶ岡遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡は当時の湖岸近くに点在している。約7000年前ころをピークに次第に湖水が退き[9)]、湖は湿原に変わっていった。岩木川下流域にひろがるこの広大な原野が、弘前藩の直轄事業として本格的に開発され始めるのは17世紀後半になってからである[10)]。原野のただなかに新しく開かれたムラに暮らす人々にとって、生活資材の確保は切実な問題であり、サルケが生活の多様な場面で活用されていたものと考えられる。

サルケ（青森県立郷土館蔵）

庶民による泥炭の利用に関する記録は、18世紀半ば以降に見られる。『津軽見聞記』(1758,宝暦8年)には、「さるこ」と呼ばれるものが使用されていたと記される[11)]。『広須組三新田農術覚書』（1773,安永2年）では、「さるけ地」の畦の深浅によって稲の生育に影響のあることが記されている[12)]。『そとが浜風』(1785,天明5年の条)には、「さるけ」や「やちわた」と呼ばれる「木のくちたるごときもの」が火にくべられていたことが記され[13)]、同書の著者は別の著作のなかで出羽、越後、三河、尾張、伊賀などにも「津軽の猿毛（さるけ）」と同様のものが産出すると述べている[14)]。『奥民図彙』(1781-1801,天明～寛政年間)には、「さるけ」を掘り起こして乾燥させ、火をつけてその灰を肥料とする農法があったことが記される[15)]。『東奥沿海日誌』（1850,嘉永3年）には、出来島、車力、七里長浜の人家のない浜辺などで「がし」（泥炭）を燃やしていたことが記される[16)]。これらの書物から、近世期には人びとがサルケを利用していたことを推し測ることができる。

近年は、青森県立郷土館による調査『再賀の民俗』(1998)[17)]をはじめ、青森県史編さん事業による調査『青森県史叢書 岩木川流域の民俗』(2008)[18)]やその成果である『青森県史 民俗編 資料 津軽』(2014)[19)]、『青森県史通史編3 近現代 民俗』(2018)[20)]に、事例の要約とそれについての見解が示されている。市町村史の編纂事業に関わる著作では『五所川原市史 史料編Ⅰ』(1993)[21)]に、詳細な事例が示されている。また、個人や団体の調査では、森田村生活改良普及事業による『さるけと詩のなかで』(1982)[22)]、弘前大学の学生による『こまおどり』(1984)[23)]や、野本寛一氏による「平地水田地帯の民俗－津軽の『サルケ』を緒として」（2005)[24)]に、聞き取り調査にもとづく事例が報告されている。野本氏の論考には、本稿で扱う稲垣村（現つがる市）繁田を含む、五所川原市藻川、同長富、木造町（現つがる市）土滝、同吉見、同山吹、車力村（現つがる市）牛潟の計7箇所について詳細で具体的な事例が示され、考察がおこなわれている。これらの記録や論考から、近現代における当地方でのサルケの利用について推測することができる。

1）青森県立郷土館学芸員　青森市本町二丁目8-14

つがる市稲垣町(旧西津軽郡稲垣村)

津軽平野の北部、岩木川下流にひろがる標高平均1.9メートル[25]の平坦な沖積地に位置している。水田耕作に適した地理的条件を備えていることから、米作が村の基幹産業となっている[26]。旧村名である稲垣村の名は、稲穂が黄金色に輝く米産地であることによるとされる[27]。平成17年(2005)に木造町、車力村と合併し、つがる市となった。平成30年現在の人口は3,844人、世帯数は1,476世帯[28]。

大字 繁田(しげた)

旧稲垣村域の北東部に位置する。江戸初期には未開発地であったが[29]、天和3年(1683)、千葉嘉兵衛が鶴田村から出野里村(現つがる市木造出野里)へ移住して子孫代々開拓に従事し、野末、家調、繁田、本増、福富、下富菰、沖善津、語などの村々が次第に開かれていったという[30]。これらのうち、繁田は正徳3年(1713)頃の開村であるとされる[31]。明治初年の繁田村の家数は15軒[32]であった。明治9年(1876)、大小区制にともない、家調村・下家調村が繁田村に編入され、明治11年(1878)には西津軽郡に属し、同22年(1889)の町村制施行により稲垣村の大字になった[33]。かつては岩木川対岸の神原村(現五所川原市金木町神原)との間に神原渡があり、船による交通があったが、同41年(1908)に渡し場の約300m上流に神田橋が架橋され、陸路でつながった。

つがる市稲垣周辺略図
文中にあらわれる集落名や河川名等を中心に記した。実線は現在の市町村境、破線は平成17(2005)年の合併前の市町村境を示す。

大字 穂積(ほづみ)

旧稲垣村域南東部に位置する。元禄2年(1689)、二代高橋太左衛門繁達が新田普請奉行となって、芦部岡、楽田、野末、鶴見里、とともに開かれたうちの1村である[34]。明治9年(1876)に鶴見里村、野末村、細沼村が穂積村に編入された。明治11年(1878)には西津軽郡に属し、同22年(1889)の町村制施行により稲垣村の大字になった[35]。

3. 調査結果(データ)

(1)つがる市稲垣町繁田

① A氏 昭和7年生(86歳) 男性

居住の経緯　当地で生まれ育った。

呼称　サルケと称した。

使用年代　昭和29年に結婚したころは、マキストーブでサルケを焚いていた。昭和30年前後の「かなり遅くまで」サルケも焚いていたという。いま、サルケについて記憶している者は、自分くらいではないかとA氏は語る。――「うん。たいしたささぐまでサルケも焚いだね。うん。このえ(家)建ででがらだばんだがらな。うん、シトブさも焚いだりなんがしたねな。うん。マギストーブ。マギストーブで。今でもあるばてな。うん。おろう。んだなぁ。ううん。ワァ高等中学終わってがらだどごであの、ワァ18、19だでぁ。22のあだり、あの、おえのカガ来たどごで、ろう。ムガシ思い出すろ(笑)。」「うんだあ。オラぐらいのもんだべえ、そういうづおべでるずな。」

稲垣町繁田

定義・分布・質　サルケとは「草の根」であるという(「採取法」の項参照)。かつてサルケが採取されたことがなく、サルケがそのまま残っていた場所は、区画整理のあとも稲の生育がよくなかったという。サルケが採取された跡地の場合は、客土が十分になされたことによって、とてもよい田になったという。A家が所有していたのは太田光(おおたっぴ)方面の地所であり、土地は二束三文で買った。開墾するための機械も何もなかった当時、よく田にしたものだと思う。しかしぬかるみがひどく機械を入れることができないという問題があった。まもなく、圃場整備が始まった。サルケは乾燥すると非常に燃えやすいものだという(「乾燥・運搬・保管」の項参照)――「今の太田光のクガグ(区画)整理であの、ちょどあだってさ。いぐねえ田であったなぁ!」「うん。これサルケ切たあどさ、あど区画整理なって田にしたどごその田たいしたいひてあたねなあ。やぱりサルケあるどごイニ(稲)いぐねひてあたね。サルケ切らさね(場所はよくなかったが)、切たあどのヤヂだばチヂも入たしろぉ。」「それ最初田にすずぎや、機械もなもねえし、よぐアレ田にしたもんだなぁどもる。今でもその、二束三文に買ただ。そひて。したばて、買て作たどごなぼもね、しぐこだ圃場整備始またどごでな。うん。いぐね田でや。ぬがて、きけ(機械)もなもはねで。うん。」

入手法　もっぱら、太田光に所有する三反の土地（ヤチ）からサルケを自給的に採取した。その場所に行くには直線道路がなく、たいへん遠かった。――「うん、ろうあのオオタッピ（太田光）てすだね。ヤヂのなめ。ほとんどしょからばり、その通りがらばり、サルケ切たなあ。」「（太田光のヤチは我が家の）所有地。おえのえでサンダン（三反）あたな。ずーとこうサンダン。そのふとによて7反もあたふとあたしそつぁ。うん。まず、こご行てこう行ってこがらがそうながたてそごさ行げねであたねろぁ。うん。そごちゃながなが行がいねであたてや。」

採取の目的　A氏はサルケを採取する目的は「燃料」の確保であるといい、サルケの採取と客土によって田地を改良するという考えは「なかなか出てこなかった」（殆ど意識されなかった）という。稲作が満足にできるようになったのは、大規模な圃場整備がおこなわれたことによると考えている。――「（サルケを採取する目的は）燃料。燃料、まずカギノハナてあの、カギつだあの下さこう、いぷてひてや。まちゃいげば『サルケかまりさえる』ってして笑われだもんだ（笑）。うん。」「田んぼよぐするず（田地を改良するという）キモヂだばながながではてこねな。ほじょ（圃場）整備なもやてねどぎだごどで。圃場整備あってではじめで、稲やらさるだどごでろぅな。」

採取の時期・場所・主体　太田光周辺がヤチだった頃、A氏の家では約3反の土地を所有していた。人によっては7反持っている人もいた。サルケの採取はそのヤチが中心であり、カヤも刈った。A氏は子どものころ、サルケを切る手伝いをした。――「太田光（おおたぴ）まだヤヂであこがらカヤかたあだりの、あこがらろ、サルケだの切たおおの田もサルケ切てまいでおいだ」「うん、ろうあのオオタッピ（大田光）てすだね。ヤヂのなめ。ほとんどしょからばり、その通りがらばり、サルケ切たなあ。」「（太田光の土地は共有地ではなく我が家の）所有地。おえのえでサンダン（三反）あたな。ずーとこうサンダン。そのふとによて7反もあたふとあたしそつぁ。うん。まず、こご行てこう行ってこがらがそうながたてそごさ行げねであたねろぁ。うん。そごちゃながなが行がいねであたてや。自分もでもな。みなあののりづあむあの、カヤここだ、なもでねぁお金にするものねぇどごでヤヂのながさ行ってそのカヤむってカヤ、えさ干したもだね。うん。」

採取法　サルケに垂直の切り込みを入れる道具は、テンチキ（テンツギ、テンテギ）である。「ゴミ」[36]がつかえて切れにくいことから相当苦労しただろうという。表層部とサルケの層との間の分かれ目を手指の感触でさぐり、手を差し込むと、「地面」（表層部）と「草の根」とが分かれた。表層部は捨てた。切れ目に指を差し込み持ち上げると、サルケの塊が「カタッ」と倒れた。塊は、カンピチャという道具（写真）に乗せて引き上げることもあった。これにのせて引き上げると、背中まで「あがすすけだ水」に入らずに済むのだという。カンピチャは、田起こしや長芋掘りに用いる道具である。湾曲した柄は、最適なものを見つけ出すことが難しく、非常に価値があるものであるという。刃は鍛冶屋や鉄工所で作ってもらった。A氏は子どものころ、田んぼの端でサルケ切りの光景を見ていたが、切っている人の肩がようやく見えるほどに水が深かった。その採掘は、とても器用なものであったという。

カンピチャ

サルケは上から二段分を採った。これをA氏は「二重あげ」と表現する。積み上げもフタマギ（二段重ね）にするが、そのためには断面をきれいに切る必要があった。それは技術的に難しかった。――「（写真の道具の実物をみて）うん、んだでぃぁ。サルケ切たり、上げるにな、使ったでぃゃ。切りごみせば、それごど上げるに使ただべおん。」「うん。何てす名前だべ。ワも85もなってもまだ、見覚えあるばて使たごどねもんよ。」「うん。おろぉ。よぐあたな。これだきゃそうめたに見付けらえねだこの柄な。」「んだなこれ打だへだだな。うぅ。鉄工所だりさ打だへだカジヤさ。打だへだもだ。」「やぱり、あの、燃料につかたもだどごで、あの、切るにこえて切るさただで切るにだばむたど見でてづだいさへられだどごでろ。てづだいした（だから、この道具について知っているのである）。こうゆびこへでやてろ、こへて、こう上げるづそごまでやた。ゆびここうへで、切りぐぢさこうへでやれば、うん。やぱり地面どサルケの草の根どのワガレあてせぁ。こちゃこへばぁ分がえでくるね。その田のきぢちでサルケ切たあどの田んぼおいでかたもの。おいでかて、今の大田光のクカグ整理であの、ちょどあだってさ。いぐねえ田であったなぁ！（笑）。やぱりひでえ田であったぁ。それえ、道路もなもねえごどで、この大通りさ出すにたいした苦みだねな。うん。みっつがよっつそ（背負）って。これ（この道具）よぐあたなあ。うん。テンチキって、こうキジつけるやづな。テンツギだばいぎさするまで、いげさすまであた。テンツギ、だあ、これ（この道具）だば上げるにろう、これだば上げる人だば苦（く）みだべになあ。テンテギ刺したづ、えこごまでいたどごでそれでも1メーターだばいてねえや。うん。その田クガグ整理あだたきゃや、たんだツヂ必要だもんでねげぁたなぁ。あだりのいいツヂや、んだでばなサルケだてこう二重上げしてるもだものそちゃ。こちゃまいでな。」「二段だね。あどどーへムガシだてあお、二層に分がえでるもんだべなあ！二層に分がえでるな。こええてわんつかこうおごへばカタっとこうにな。へばさぁやぱりはだがなてるもんだどごで。うん。いいもの（道具）めへでもらたでぃゃ。」「（私自身は実際に）上げだやづ見だごどねえな。うん。まあ、あの、どつえ、えこで、ハダガなて、きぢつけで上げだり、上げだやづだば見だばてこれつかたやづは見だごどねなぁ。うん。」「（この道具は）田起こしもんだ。ムガシのもんだろぅ。カンピチャてすだな。カンピチャてすべおん。これもまず、田起ごしに（筆者注：「田起こし」という名詞ではなく、「起こすのに」「起こすために」の意）うん。カンピチャてあの、

このごろだばそごだりさかげどげば持ぢだひて長芋掘たりな。うん。へでもあだらしい柄つけでろう。」「んでねなワ今初めで見だ。うん。こいだばちょこちょこ見だね。あの、サルケ切るにいぢばん最初に使うんたもんだもんな」「（切れ目を入れたあとは手で掘り起こすと）んだこうへばこうカタッと、わがるやてオケル（おっける）にな。これこだこへてしゃ、上げるだね。うん。サルケごどこれさのへでしゃ。そしねばじとセナガまでアガすすけだ水のながさへねゃまねもの。こえあればろう。こやて。うん。じめさこやて上げでそつあうん。で、器用だもだなあ。オラあ子どもなあだり、これ、じーっとこぢのいい田んぼのほじまでサルケ切たりなんかひてや。うん。水いぺあるねえ。あげるづ見ればへながさ、かだのあだり見えだりめねだり、そんでぁ。うん。」「サルケでもいぐ切らさねでやぁ。スパッとこう碁盤に切らさればいやたて、いぐ切らさねもんだなあ。いぺつかえでや。そでねぐゴミ、どんだのこだていぺつからえで。こちゃまぐにろう。ながながちゃっとシカグでねばま、ふたまぎにまがさねでばな。ずーっと上までまぐだものそちゃ。」「二段目（表層部の下にあるサルケの層）だな。めーでるやづ、下さ、してでまるだでばの。（表層部は）してでまるだね。穴のながさへで。」

乾燥・運搬・保管　フタマギ（2段重ね）にして乾燥させた。マギカエシ（乾燥したものをひっくり返す）はA氏の仕事だった。乾燥後、自宅に運搬した。――「うん。こらんども、あの、高度だアレだでばの、道具だでばのぉ。田起ごし（サ5段連体形）につかただなあ。「サルケでもいぐ切らさねでやぁ。スパッとこう碁盤に切らさればいやたて、いぐ切らさねもんだなあ。いぺつかえでや。そでねぐゴミ、どんだのこだていぺつからえで。こちゃまぐにろう。ながながちゃっとシカグでねばま、ふたまぎにまがさねでばな。ずーっと上までまぐだものそちゃ。うん。」「道路もなもねえごどで、この大通りさ出すにたいした苦みだねな。うん。みっつがよっつそ（背負）って。」

22歳で結婚するまで、しばしばサルケを運ぶ手伝いをさせられた。太田光がまだヤチで、カヤ刈り場でもあったころであり、まだ農道が整備されていなかったので、大通りまでサルケを運搬することには、並ならぬ苦労があった。3-4個を背負って移動したが、全身がゴミだらけになった。重たいものを背負うために（動きやすくするため）裾上げしているので、（裾から入り込んだ）ゴミが尻の中まで上がった。あるとき、草を焼こうと火を付けたところ、火がサルケに燃え移り、サルケが二山（ふたまぎ）ほど燃えてしまった。乾くとこれほどにまで燃えるものかと、A氏は思った。――「いずーっとまいで、ヤヂまぎがえしたりしだばオラばつかてやてよ。（置いて）まだまぎがえすだ。ウチさもて来るに。ねああ、ウチさもて来るづオラのシゴドだどごでや。がぱどゴミかぶてまる。うん。オラぁ、次男ねへてぁたどごで、あの、嫁貰るめだばむたどふぱらいであたなぁ。うん。なもこた背こだばて、物しょてえばまだがいねでなあ。うん。うん。」「太田光（おおたぴ）まだヤヂであこがらカヤかたあだりの、あこがらろ、サルケだの切たおおの田もサルケ切てまいで置いだやづまぎなおさへらいでわがてらもの。」「それえ、道路もなもねぇごどで、この大通りさ出すにたいした苦（く）みだねな。うん。みっつがよっつそ（背負）って。」「ワァだば……、ワァろう。まいだほがのサルケさ別にし（火）付けるて気持ぢでし（火）つけだでねばて、ほがの草さしつけだきゃしはし（走）てや。そのサルケのまぎ、ふたまぎばりのづ、焼げでまたづぎあたねなぁ。乾げばあおなるだねろ。」「うんだあ。オラぐらいのもんだべえ、そういうづおべでるづな。しょったり、なんかして。うん。しょるずもてづだどがかいでやあ。しょてずっとお尻までゴミ来だもの。うん。もでどごで裾上げしてるどごでゴミつ、ゴミにかて、サルケつ、ちょすだばオラほぢだべなぁ。うん。」

用途　年代的にかなり遅い時期まで、サルケを燃料として利用した。マキストーブでも利用した。主に冬に使用したが、炊事にも用い、おかゆを煮ることもあった。祖父がサルケの熾火でおにぎりを焼いてくれたこともあった。――「うん。たいしたささぐまでサルケも焚いだね。うん。このえ（家）建ででがらだばんだがらな。うん、シトブさも焚いだりなんがしたねな。うん。マギストーブ。マギストーブで。」「うん。一冬、まんづ使（つか）たなぁ。」「（炊事に使うことも）あったな。それもあた。」「おがゆ、な。おがゆ煮だり、うん。オラ学校さはるになたきゃおえの年いたジサマ、おにぎりろう。そのサルケさ、サルケの、あのオ……（オキ、オコリ＝熾と言いかけて）、燃えかすさ、あげで、焼いでけでや。」

副産物　炉でサルケを燃やしたが、柱時計の文字盤が見えなくなるくらい煙たかった。町に出かけると、「サルケカマリする」と笑われた。――「まずカギノハナてあの、カギつだあの下さこう、いぷてひてや。まちゃいげば『サルケかまりさえる』ってして笑われだもんだ（笑）。うん。」「うん。一冬、まんづつかたなぁ。あの柱時計の文字盤めねぐなるだげいぶるだ。ははははは。」

A氏が小学校に入るころ、祖父がサルケの熾火で握り飯を焼いてくれた。風邪を引けば、サルケの火でおかゆを炊いてくれた。「みんなのあのニオイ、忘れないなあ！やっぱり、間違いなく、我が家のニオイですよ。忘れられないよ」とA氏は語る。――うんねぁ。ニオイだばすもだ。うん。まずカジャふいだり（風邪を引いたり）せばろう。おがゆ、な。おがゆ煮だり、うん。オラ学校さはるになたきゃおえの年いたジサマ、おにぎりろう。そのサルケさ、サルケの、あのオ……（オキ、オコリ＝熾と言いかけて）、燃えかすさ、あげで、焼いでけでや。（家族）みんなの、あのニオイ忘れねなぁ！やぱりまぐねぐなぐ（まちがいなく）、おえ（我が家）のニオイだでばの。うん。忘らいねぁろ。（今）そういうごどねはんでアレだばて。」

サルケ切りの場所では、カヤも採った。現金収入にもなった。自宅へ運んで干した。――「自分もでもな。みなあののりず編むあの、カヤここだ、なもでねぁお金にするものねぇどごでヤヂのながさ行ってそのカヤむってカヤ、えさ干したもだね。うん。」

その他　昔のことをよく覚えていますねと話しかけると、「これ（サルケ掘りに関すること）だばおべでるなあ！」と感慨深げに強くうなずいた。A氏にとってサルケ掘りは、強く印象に残る経験であったということが窺われた。

A氏が18～19歳のころ、終戦の前ころに、太田光のサルケを採掘するヤチに日本軍の飛行機が墜落した。家の年寄りたちはみな、墜落した飛行機を見に太田光のほうへと出かけていた。A氏も向かったが、向こうに見える飛行機にどれほど走ってもたどり着けなかった。――「ワァ高等中学終わってがらだどごであの、ワァ1819だでぁ。22のあだり、あの、おえのカガ来たどごで、ろう。ムガシ思い出すろ（笑）。終戦……終戦なるちょとめに、その、サルケ切たすぐそばさ（日本軍の）飛行機落ぢでや。飛行機あれ、不時着しただべなあ。走て行ったなぁ！えさ来たきゃえのとそり（年寄り）だぢそちゃ出はてまじてあたねろ。ずーとオギまであのコービ（飛行機）、じと、きょのそばにめる（見える）ばてナボはけでもそごさ行がいねであたな。うん、ろうあのオオタッピ（太田光）てすだね。ヤヂのなめ。ほとんどしょからばり、その通りがらばり、サルケ切たなあ。」（2016年11月28日取材）

② B氏 昭和9年生（84歳） 男性

居住の経緯　当地で生まれ育った。

呼称　サルケと称した。

使用年代　B氏が13～14歳ころまで、すなわち昭和22年～23年ころまで使用した。――「（使ったのは）うーん、んだな。うーどオラ中学校さ入ってるどぎだどごで今、い、60、70だな。70年、72～3年前だな。13才か14才の頃（まで）だ。」

定義・分布・質　サルケは「草の根」であるという。その草の根が長い時間をかけて押されて（「押さいで」「押さえでるどごで」）、締まったものであるとB氏は考えている。また、サルケは「燃料」であるという。ヤチや田に分布しており、40cmほどの厚みしかない層もあれば、場所によっては（例えばヤチなどでは）1枚あたり厚さ30cmの塊を3枚、すなわち90cmほどの深さまでサルケの層厚のある場所もあるという。B氏の家では、自宅から1kmほど離れた自家の田から採取したが、そこは表層部が20-30cm、その下にサルケの層が1メートルほどの厚さで分布していた。また、サルケには良いサルケと良くないサルケがある。「かでえいいサルケ」と「やわらけえサルケ」である。前者は堅く締まっており、火持ちがよく熾が残るが、後者は火がつきやすいという利点はあるものの、燃え尽きるのも早い。B氏が採取したサルケは「土まじゃりの」サルケで、燃えにくかったという。今、このサルケを掘ろうとしても、難しいだろうとB氏はいう。客土をし、区画整理をし、トラクターで耕しているため、相当深く掘らなければ到達しないという。しかし、深く掘ったときには今でも時折サルケが混じってくることがあるという。――「（サルケというのは）草の根。草の根ごと、何てすだば、あの、根、草の根があの、なんてすだべな。ムガシがらずっとこうあの、押さいで、それがサルケてあの、何でムガシは燃料につぐったもんだいな。」「その田んぼによって、1枚ぐらい、40センぐらいしかねえ層もあるし。へええヤヂさ行っていい層さ行げば、3枚ぐらい切るにいいんた深い層あるわげさ。うん。」「ひぇ、いぐ火つげぁこだ、割とあの、サルケっていいサルケってかでえもんだんだ。うん。ひぇ、ヤ、ヤヅのあの、やわらかいサルケは、ブワブワブワどやわらっこいどごで、はえぐ燃えでまるばって炭のごねね。かでえいいサルケは、あの、炭のごるわげや。うん。うん。まあ、いいって、普通柔らけえサルケは火つぎやすばってよ。すぐ燃えでまるわげ。かでサルケは、田んぼのナガのサルケは押さえでるどごで締まって、ナガモヂすだね。へぇヤヅのあだりのサルケは、ブワブワブワて柔らこいどごで、早ぐ火ねぐなって炭ものごねわげ。」「あの、田んぼの、あのこれぐらいの上にツヂあって、それツヂをこれぐらい寄せで、その下にサルケてこう、イヅメーター（1m）ぐらい。上は、んだな。2～30cmぐらい。うん。」「いっぺえ乾燥してそれでも燃えねもんだでこだツヂマジャリの、サル、草の根だどごでさ。」「今だばいいばってムガシだきゃなも、みなサルケばり焚いだもんだ。（サルケ切りを今やろうと思ったら）今だばながながでぎねえ。うん。区画してまって、客土してまって。深く掘ればだば、うん。出るばって。あ、まずおっきいトラクターでそごまで耕してまっちゅうどごでや。ウヂの田んぼでもあれだ、あの、深いドゴ掘ったりへば、サルケみてたず、かだって来るばって、今、ツヂあがってまっちゅうどごでや。何メーターも、1メーター50ぐれえも、掘れば、まだへでも出るどごは出るべおん。うん。それだきゃながなが難しね。ながながでぎねね。うん。わも、65年も田んぼつくったねろ。まず、オラが年ってへば、今も元気だ人ってばまず一人が二人しかいね。あどみな脳梗塞だのや、何がかがってみな入院したりして誰も、うん。」

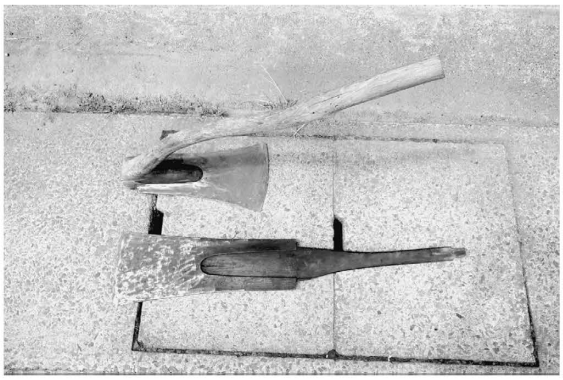
入手法　おのおのが所有する田や湿地から、自分たちの手で採取した。売り買いすることはなかったという。――「あんまりそういうごと（売買）はねがったな。みな、自分の田んぼどがヤヂあるどごで。うん。」

採取の目的　目的の一つは、燃料にすることである。二つ目の目的は、田地の開発と改良である。田からサルケを採取する場合、その田は稲作を休止した（仮の「減反」）。冬場にバソリで岩木川べりから砂混じりの赤土を田に入れた（砂客土）。客土することによって、田地は改良され、稲の成長がよくなると同時に、馬を入れられるようになり作業効率も向上させることができた。また、田のない人はヤチからサルケを切った。――「それがサルケてあの、何でムガシは燃料につぐったもんだいな。木もなもない時代に。それをあのイロリで焚いで、暖を採ったわげや。」「ほでねホガがらサルケ切るどごもらって、いただいてこだあれだ、田たどえば、1枚のどご自分でこうくれば、まずそっつのほうにその、サルケ切るふとねえどごあの、田んぼねえふとあ、それこんだあ、あげるわげさ。うん。てこんだ冬に雪降ってがらこんだ、マさソリふがへで、いうが（岩木川）のはだがら、そのいいツヂもって田んぼさいれで。いうが（岩木川）のはだ。いわきがわの。アガツヂだね。砂土だでばの。それ入れてばあだ、田んぼいぐなるだね稲もいぐなるしさ。砂土いぢばんいいだね。えのがねしさ。うん。その前は田んぼさ馬もなも、いれられねえわげや、ぬがるどごで。ジブダヂ鍬で打って田んぼつくただ。で客土へば、馬こだ入るどごで、馬でこう田がぎやったんだ。うん。」「で今度たぼ、サルケ切る田んぼは減反して、うん。それでこんだサルケ、ナヅ切ったもんだ。うん田んぼの下に。ツヂとれば、サルケあっ

たもんだね。すぐ客土して、うん。それ田んぼに使ったんだ。」「うん。そひてサルケとってツヂ入れれば、最高いい田だわげさ。ヤヂをクロとってサルケとって、それさ客土して、あの、やれば、いいね最高いい、うんうん。」

採取の時期・場所・主体　サルケ切りは田植え後の夏におこなった。自宅から1kmほど離れた自家所有の田や湿地から採取した。サルケを切る作業は父親が一人でおこない、男性主体の仕事であったが、積み重ねや積み直し、乾燥後の運搬を含め、切る作業をB氏が手伝った(「採取法」「乾燥・運搬」の項参照)。――「ナヅ。田植え終わってあっつぐなってがら。うん。で今度たぼ、サルケ切る田んぼは減反して、うん。それでこんだサルケ、ナヅ切ったもんだ。」「(採った場所は)なもウヂの田んぼで。これがらイヅキロぐらい離れでるどごで。うん。これがらな。(繁田の)うんうん。」「(サルケ切りは、B氏の父親が)一人でや。」「アレ(鍬)も使った。うん。オドゴや。」

採取法　採取の作業はB氏の父が中心になっておこなったが、B氏も子どもながら手伝った経験がある。



表土除去の道具(上)と切り込みの道具(下)

まず、右写真(上)の道具で田地の20～30cmの表土を除去し、糸を張って見当をつけた。この道具は鍬の一種だが、田のクロを草の根と一緒にこの道具で切りとり、それで堰を留めた(ちなみに、上北地方では泥炭を同様の用途で使用していた)。B氏は、「木がまったく生えない時代」に使用したものだという。

次に、右写真(下)の「テンズキ」で糸に沿って縦に長く垂直方向に切れ目をいれ、横方向にも幅40～50cmずつ垂直方向に切り込んだ。切り込む深さは、その場所により、サルケの層が40cmほどの場所もあれば、1メートルほどの場所もあり、後者の場合には1メートルほど突き刺して、そのサルケの層が尽きて堅い層があるところまで刺した。サルケの層はやわらかく、「刺しやすいものだ」という。テンズキの柄の端、持ち手のあるあたりまで刺さった。田は排水がよくないので水がたまっており、トクナガを履いての作業だった。水は濁っているが、手探りでサルケと地面との間に手をいれてやると、「ガバガバと」地面(表層)が離れたという。

テンズキの使用

次に、サルケ切り専用のカマを使用した(現存せず)。そのカマは特殊なもので、握り手部分は拳ほどの長さしかないが、刃わたりは普通のカマの倍ほど、30～40cmほどの長さがあった。このカマでサルケを深さ(厚さ)約30cmほどの底面部分を切り取り、引き上げた。水が濁っているので、およその見当をつけておこなう作業だった。すでに表層部の草の根を取り去っているので、「ジャワジャワと」「軽くズバズバと」切れたという。

最後に、切り取ったサルケを脇にあげるのであるが、水が溜まっているのでサルケが浮力によって軽くなり、持ち上げやすかった。サルケ1つの重さは20kgくらいあったという。

「タヂ」はB氏の家でいまも2～3丁ほど所有している。各家でも同様だったという。主に田のクロに生える雑草とともに崩れた土を上げるために用いたが、サルケに切れ目を入れるためにも使用した。しかし頻度は多くなかった。「たたきつけてやればキズが付けやすい道具であった」とB氏はいう。

――「うん。(切るのを手伝ったことも)あるある。うん。こう切ったずオガにいでこう上げで。」「(自家の田で)その上のツヂを寄せで、でこんだこれぐらいのツヂごと、あの、あれ、ちゃとあれクワみたい道具あるの。うん。まんだこにあるがもしらねな(とおもむろに車庫のシャッターを開けて)。ホラ、アレで。こらこうして、すすけでまっちゅうどごで。これで、田んぼの上のツヂを寄せで、うん。それでイド(糸)張って。この、サルケば、こう傷つけるわげ。うん。これぐれの厚さに切るもだどごで。これだいたい、んだな。うーと、深さ、30セン(cm)ぐらいだ。ヨゴは50センぐらいにして。こう、切(き)にいれで、ほして、田んぼとれば、排水いぐねどごで水いっぺ溜まるわげさ。へでこだトグナガ履いで、サルケこ切たやづごど、ずっとこう手入れで、これぐれの厚さに寄せでこだ、この、40センぐらいに切て、ソゴ(までの高さ)は30セン、幅40センぐらいに切て、てこうヨゴに切って、こうシカグに採るわげです。これぐれにこう切って。傷つけで、水たまてるどごで。これこうやれば草の根、ブスってまって、してこだ水はてこうやれば、サルケこう寄るわげですこう、う。それごと、あの、ナダみたもの(後述の、サルケ切り専用のカマのことだと思われる)持ってこう切って。うう。深さだいたいわがるどごで切って、30センぐれに切って、こう、上さ上げで、で田んぼのヨゴさずっとこう、並べるわげです。幅40センぐらいでの。これで切ったもんだもの。で重いんだ。かなり20kgぐらい重ぐなるんだ濡れでまてるどごで。うん。」「(道具の名前は)おーっと忘れだであ！ほほほ(笑)。これ(手鋤)はテンズギってすだいな。う。う、この傷付けるもの。な。これ何カ(何鍬)ってったっけな。これ何クワって。うん。なんが、(鍬という一般名の)上さ(つけて区別する呼称があったが)、んだでば。60年も70年もなるもんだもの(忘れて当然でしょう)。(この鍬は)うん、あの、ムガシあの、用水、こういうの用水ずっとあるでしょ。それをあの、留める。木もなもはえどごねえ時代に、あまりながったどごで。それでセギ留めで、田んぼさ水入る高さま

であの、上のクロってあの、草ど草の根どいっしょにこれくれえ切って、それ田んぼのセギ留めるに。これで採ったもんだんだ（つまり田のクロを切るのに使用した鍬である）。うん、たでサルケのえのあの、上に草おえで草根もあるもんだんだ。それをこのこれでこう、取ったもんだね。セギとめる。（タヂも）使った。いぺある。うん使った。ナヅ。田植え終わってあっつぐなってがら。うん。で今度たぼ、サルケ切る田んぼは減反して、うん。それでこんだサルケ、ナヅ切ったもんだ。うん田んぼの下に。ツヂとれば、サルケあったもんだね。すぐ客土して、うん。それ田んぼに使ったんだ。うん。そひてサルケとってツヂ入れれば、最高いい田だわげさ。ヤヂをクロとってサルケとって、それさ客土して、あの、やれば、いいね最高いい、うんうん。（タヂは今は）つかね。田んぼのクロあるでしょ。草ボウボウどこう田んぼさ落ぢれば、これで払って、草上げで、あの、田んぼさクロがら草これで払って、草あげで、あの、ずっとやったんだこれでな。（サルケ切りには）うんあんまり使わねえな。うんそれでも上さ傷つけるずこれでこれただすけでやれば傷つけるやすんでこれは、使った。うん。アレ（さきほど見た鍬）も使った。うん。オドゴや。ナヅ、田んぼ植えでまって、あっつぐなればこんだ冬したぐだどごでそのサルケ、あの、これぐらいしゃっこいどごさ、トグナガの人は裸足で、うん、なもはがねでな、これまで、腰まで、水たまっちゅうどごで、水たまればまんだあげやすうわげや。たなぐにいいもの。このかだまで水たまるどごで、それこれぐれふかぐ入れば、水だどごですぐあげでばな。水のナガあげるどごで軽いでばな。ろう、タヂ。こうあづもだもの、ろう。へてまただろう。一家にみな二～三丁あったもんだね。うん。（サルケ切りは、B氏の父親が）一人でや。」「（サルケ切りの道具は）こさこう、柄こついであったもだね。それでこだこうずっと刺して、1メーター刺してやるわげ。そしてこう、田んぼさ入ってな。うん。でずっと1メーターぐらい掘って。だいたい、んだな。1メーターねべな。これ（柄の端あたり）まで刺せばサルケの下まで。下まだツヂだどごで。下まであるぶんき（サルケの層が尽きるところまで）刺してやるわげ。サルケて刺しやすもんだね。んだでばな。やわらけえもんだどごで。これずっと刺してあるぶん、こごまで（柄の端、取手のあたりまで）行げばすっとサルケのどごまで行ぐわげ。へばこだ手こう入れれば、ガバガバどこう離えるもんだね。へばこう、ツヂが地面がこうがら、こう手いれればヨゴみなこうなるもんだだな。へてこだ、カマがあたもんだね。そのサルケだいたいカマの30セン40センぐらいの、30センぐらいのおの、ツヂこうかぶへで、切って、サルケ分げるわげ。そのカマ、こうけっこうみじけぐや、ぎゅっとこうなげえ、普通のカマの倍よりなげえ、草刈るカマのあえんた感じのだばて長ぐや。手はみじけぐ。今だばみれねえな。今だば。カマはんだな。30センぐらいあったんでねが。手はみじかくてこれぐれで、てっこにぎるぐれえで、この寄ったササゥゲ（サルケ）こった長さでこう切ってすさ。うん。これで上ばキズつけでまってるどごで。へでこど、30センが40センで切ったサルケごど、こい、ヨゴさ上げでおぐわげさ。普通のカマ、手だば手かがるぐれえしかいのがないわげ。したんでこだカマなげだ。したで草の根ごどぬいでるどごでジャジャワど切にいんだ。切れやすもんだね。これでもこれ刺せばソゴの、1メーターぐれえなげえサルケでも、ソゴのツヂまで行ぐどごで、（サルケの層の）下だばこれ刺さていがねんだ。サルケばりでちょんどわがるもんだ。軽ぐズバズバど行ぐもんだいな。サルケやっぱ軟らけもんだね。ううん。したんで、たながいねもの。重くて。ぬれで、水含んでるどごで。3段ぐらいに切るな。うん。だいたいその田んぼによって、1枚ぐらい、40センぐらいしかねえ層もあるし。へええヤヂさ行っていい層さ行げば、3枚ぐらい切るにいいんた深い層あるわげさ。うん。」

乾燥・運搬・保管　田のクロに上げて、マイデ（積み重ねて）おいた。ある程度乾燥しところでマグナオス（積み替える）のであるが、その際には互い違いに5～6段に積んだ。これは子どもや若者の仕事だった。「夏になると、オヤジがクロに上げておいたサルケを、『積み直ししてこい』と言われて、あの暑いさなかに積み直しに行ったものだよ」とB氏は語る。切ったものを陸にいて引き上げたり、積み上げるのもB氏が手伝った。これらの作業に関して、女性が手伝うことはあまりなかった。

水分がなくなり乾燥して堅くなるのを見計らい、お盆過ぎから、9月の稲刈り前の時期ころに、サルケを運搬した。田に通じる道は整備されておらず、湿田なので馬も入れることができない。またネゴ（一輪車）もなかったので、すべてソイコ（ショイコ、ハシゴ）による人力の作業だった。フトマルギ（1把）は5枚一組で30kgほどの重さがあり、フタマロ（2把）～ミマル（3把）を背負って道路まで運ぶのは、重労働だった。

道路からはカナグルマ（マグルマ）を馬に牽かせて家まで運搬し、小屋で保管した。――「でこんだクロさあの、上さ上げで、ちゃとこうマイデ（積み重ねて）、あのちゃとこう並べで、ほえで乾いでがらまだ、こだまぎなおし（積み重ね直し）して、干して、かだぐ、水分ねぐなれば、それ今度、あの、しょって、道路まであげで、へてこだウヂまでもてきて、こういう小屋さ入れどいで、でか、乾いでまてがら、ウツさもてくるどごで、うん。」「（切り上げた最初は）ただこう置ぐの。（互い違いではなくただ）重ねで。（ある程度）乾いでくればこだま、出して、互い違いにこんだ。田んぼさまぎなおしして。互い違いにへば、乾ぐわげ。うーん。んだな。これぐれ高ぐ積むどごで、5段、6段。うん。今だきゃサルケきゃ見らいねえいの。うん。それでも田んぼさ行って、その、ムガシあの、ヤヂてあの、草おえだヤヂてあたもんだだな。カヤとが。その下さ行って掘れば今でも田んぼ起ごせば出でくるだ。」

「ナヅだば。うん（私も手伝いを）やる。あれナヅなればまだ、オヤズがクロさ上げでおいだやづ、ナヅあの、自分の子どもでも、わげえふとだづ、サルケまぐなおしさ（積み直しに）行ってこいってへば、あのあつどぎこんだ、ナヅにそえ作っておがねば冬焚ぐの（ないもの）。うん。（切るのを手伝ったことも）あるある。うん。こう切ったずオガにいでこう上げで。こんだまいでけで（積み上げてやって）、うん。（女性が手伝うということは）それはあまりねえな。うん。ネゴあるわげでねし。しょって、道路まで出すだもの。あの重でぇもんだもの。うん（人力で）。みなや。道路もなもねえ。馬もなもねえ。あってもいがねえ、ヤヅの、湿ったどごで、馬はればのがって（ぬかって）まるどごで。（背負う道具は）今ねぐなったいな。みなあっただばってや。『ソイコ』ってす。うん。

ま、梯子梯子使うんだいな。(道路から家までは)馬で。馬でカナグルマって。うん。むがしガダガダず車で馬にひがへで。うつさ持って来てこだ小屋さ入れで。いっぺえ乾燥してそれでも燃えねもんだでこだツヂマジャリの、サル、草の根だどごでさ。うん。(持って来るのは)だいたい、お盆過ぎでがらだどごで。9月までかて稲刈りはるまえに。田んぼがら。うん。へで小屋さいっぱい詰めでおいで。だいたい、んだな。(1把)5枚ぐれでねが。みな重いもんだね。そのうづんだな、30kgぐらいかるでねな。ふとまるぎ(1把)にして。それこだ、ふたまろもみまるも(2把も3把も)その、ショイコさつけで、馬の、マグルマいるどごまで出して。」

用途 「木もなもない時代」にサルケをイロリで焚いて暖をとったとB氏はいう。B氏はジャッパ木を山ひとつ分、2〜3名で共同購入し、サルケの中に挿入して焚いたと別に語っている(「操作」の項参照)。すなわち、木がないというのは比喩的な表現で、「木もなもない時代」という表現は、木がまったく手に入らないというわけではなく、燃料としての木が十分に手に入らない時代という意味だと思われる。そして、この言い回しから、燃料として用いられるものの象徴が「木」であり、木が理想の燃料であったとB氏が捉えていることがわかる。——「木もなもない時代に。それをあのイロリで焚いで、暖をとったわげや。」「そして冬に焚ぐ、火つけで、暖房。暖房とておぐだ。」

サルケの火は調理にも用いた。サルケを焚いているイロリにカギノハナを下げ、大きなナベをつるして煮物をはじめさまざまな調理をおこなった。食物を串刺しにして、ロバタでサルケの火に炙ることもあった。木を燃料として使える家は集落に10軒前後しかなく、多くの家ではサルケを燃料として用いざるを得なかったという。B氏の「それ(サルケ)でねばまいねでばな」(サルケでなければならないじゃないですか、サルケしか使えるものがないじゃないですか)という表現は、別の燃料を使いたいが、使えなかったという気持ちをあらわしている。堅くしまったサルケの場合には熾ができるので、その上におにぎりを上げて焼くこともあった。しかし木炭と違い、おにぎりには灰が多量にまとわりついた。それでも結構美味しかったよ、とB氏は笑いながら語った。——「(炊飯も)ううんみなそれでねばまいねでばな。うん。イロリさ、アレ、カギノハナで下げで、おっきなべかげで、うん。そえで煮物でもヤギモノでもみな。うん。ふふ。うんみなやる何でもみな串さ刺してイロリさみな刺して。ガスあたわげでねし、うん。たんで程度いいウヂさ行げば、木ばり焚いで、うん。木の、木ばり焚げば炭、あるどごで、その炭さツガネあげで焼いだりすばって、ふつはサルケだげ、木たぐふとってブラグで10軒もあるがねがだもの。あどみなサルケだげだ。うん。うんみな(サルケの火を利用した)。」「うん。サルケの炭てわりとのぐの、それさずがに、おにぎり上げで焼いだもだね。かでえサルケは。やわらけえサルケは炭のごねえどごで、うん。そうずがにな。たんでおにぎりさっきゃあいぺあぐつぐ、それでけっこううめえもんだね(笑)。うん。」

操作 山から拾ってきたジャッパ木をサルケの中に挿入して焚いた。サルケはよく乾燥させたあとでも燃えにくかった。そこで、サルケの中に木を挿入して着火した。また、そのことによって「熱みがいい」すなわち火力も向上した。——「ジャッパ木、うん。山ひとつで買るわげ。1枚とが2枚とがで。それ、2〜3人で買って、山さ行ってこんだ、サルケのナガさ入れで木へれば、あの熱みいいどごで。」「いっぺえ乾燥してそれでも燃えねもんだでこだツヂマジャリの、サル、草の根だどごでさ。」

副産物 どれほど大きな家でも着火時には家の中に煙が充満した。目にしみるが、慣れているのであまり苦ではなかった。だがこの煙が原因でメクサレになる人が多く、非常に目に悪いだろうとB氏は考えている。青森や五所川原などの都市部に住む親戚が尋ねて来たとき、サルケに火をつけると言ったら、『煙たくてダメだ』『目にしみる』と言って家に入らなかった。しかし、(とくに着火当初に)多くの煙が出るからこそ、暖かくなるのだとも語る。——「サルケだきゃえのながいっぱいえんぷてなも目、たんでみな昔メクサレて目わるふといっぺえ出来だでばな(笑)。いやいや、最初だっきゃいぱい、煙いっぱいでねばナガもあったがぐなんねえ。(煙も暖かさのひとつ)んだべえ。えのながいっぺえ煙だらげになるだもの。」「いやムガシだっきゃアレだうづの、あの、オバサンあの五所川原どがや青森にいであったばってや、エさ来ればなも、いぷ、火つけるったきゃエさ入ねね。い、『煙たくてまい』『目さすむ』ってあの煙、ウォダチだば慣えでるどご(で)あまり苦にしねばって、ホントに目(に)だば悪りいべおん。ううん。たんで来れば火つけれで早えぐ煙ねぐしゃあなねね。最初の火つぐどぎだきゃエのながナボおっきいウヂでもや、なも、煙たくて(笑)。フフフ。」

ニオイも強烈であった。B氏が川向こうの金木(かなぎ)にある中学校に通学していた13歳のころ(昭和22年ころ)、「お前が近くにいるとサルケカマリ(サルケくさいニオイ)がするなあ」「そばに来るな」などと、しばしばバカにされた。「西(金木よりも西側、岩木川にかかる神田橋を越えた稲垣方面を指す)に行けばサルケカマリがする」「どこの人かわかる」とよくバカにされたものだという。金木周辺はサルケを焚くことはなく、もっぱら山の木ばかりを焚いていたので、サルケのニオイが独特のものとして映ったとB氏は考えている。夜中にトランプをやって家に戻るとタバコのニオイがするのと同じようなもので、慣れている自分達はわからないのだとB氏は語る。それほどの悪意を感じることはなかったが、バカにされたように感じたという。——「ニオイつえもんだね。だんでおらも、中学校さ、金木の中学校さ入ったわげさ。したきゃや、『サルケカマリす』って。やっぱし、ニオイすね。タバゴどふとづだじゃ。うん。たんで、よぐバガにされだもんだ。『サルケカマリす』ってな。『なそばさいればサルケカマリす』って、オラ、タバゴのまねどごで、あの、ヨナガにトランプやったりしてや。戻ればや、こうのむどぎタバゴのニオイちぇもんだねな。ひぇあオエのカガどセンタグすに、まぁーんず『タバゴカマリす』ってや。むせだもんだね。それど同じだべ。だんで、オラダヅなれでるはんでわがねばって、ベロっとそばさ来ればみな、『サルケカマリす』って。『わがる』って。『どごのふとだがわがる』ってすだ。

サルケ焚いでぁずば。金木あだりだあサルケたがねえ山の木ばり焚ぐどごですさ。うんうん、バガにされだもだ。ふふふふ（笑）。うん。サルケカマリのごとはしゃべらえだ。『西さいげばサルケカマリす』ってな。うん。まんずバガにされだもんだね。そばさいげばオラタバゴど同じだべ。（ただ、それほど）なもなも、悪意ねえ。うん。そうねばって、たて、なんがこう、バガにされぢゅんた感じでさ。のあ、『なのそばさ行げばサルケカマリして、そばさくな』なんてバガにされだりしたもんだね。うん。中学校の（ころ）。だんで13、の頃だでばな。ほえでもその頃でも、ブラグで木なんぼがサルケのナガさ木いれで、やるってせば何軒もねもんだ。うん。

サルケの灰は灰肥として畑に撒いた。――「（アグは）ハダケさ撒いだもんだ。う。へあやっぱしモノいいとがな。うん。たんで、ムガシは、ハダゲさ野菜植えでもジャバイモ植えでも、ハダゲの畝こうあげで、それさ、藁ずっと敷いで火つけで、それさジャガイモでも何でも植えだもんだよ。へば虫つがねえとが、うん。確か、アグはたしか。（融雪は）あんまりねえな。オラタヅ田んぼつぐるよになってがらだばあの、肥料、ケイ酸石灰とが、苗代あだりはえぐ消（け）やすに、石灰撒いだもんだんだ。ひゃそご早えぐガバッと下がっていぐどごでな。うん。まあ、アグ撒いだ人もムガシあっただ。うん。たて、科学肥料のほういい。」

その他　B氏は今もさまざまな道具を小屋に保存している。既製品に手を加えた「半民具」もある。下記はその一部である。

イビ（エビ）　すのこ状の部分は山から採って来た竹を割って自作し、金具の部分は鍛冶屋に作らせた（写真右から2番目の道具）。昔の堰の泥は今よりもやわらかくトロトロとしていたので、堰の中に入ってこの道具を使うと、泥だけを容易にすくい上げることができ、楽だったという。

B氏所有の農具

スコップ改造イビ　現在の堰の泥は、土がよくなり硬くなった。昔のイビでは掘れず、イビの先の匙状の部分が小さいので、効率が悪い。また、道具自体を入手するのが難しくなった。そこでB氏が考え出したのが、既製品のスコップに穴をあけた手製のイビ（写真右から1番目の道具）である。スコップなので匙面が頑丈で、硬く締まった堰の泥を掘る作業に適し、また昔のイビよりも幅広で作業効率がよい。また、適宜開けられた穴によって、水の漏れ具合と泥の残り具合がちょうどよくなるように工夫されている。B氏が作業の経験から導き出した工夫の産物である。――「それスコップさアナあげで、セギホリさ使った。それアナ開ければ泥、て水逃げで泥は残るどごで。これワア作ったの。これ（エビ）今ねぐなってがら、だんでセギホリあればこれで。これ作って。自分でろう。（今も）使ってる。」「これはセギのナガさ入ってこう、（竹の部分は）これ自分で作って。これ（金具の部分）だげ鍛冶やさ注文して。これは自分でつぐるわげ。うん。て簡単だもだね。（簾の部分は）竹で。竹割って。今だばあの、どった竹でも売ってらってムガシ、山さ採ってきて竹ごと割って、これジブで作ただもの。これだば（今は）よげつがねいな。よげ泥はいねどごで。うん。これ（先の匙の部分が）つせどごで、なんぼも泥ハイネわげや。今の泥はわりといい、ツヂいいどごで、逃げねばてムガシは泥やっこどごでこれでねば、トロトロに逃げでまって。これでは、スコップ（で作ったオリジナルの手製エビ）では全然泥逃げでまって。これ（エビ）は泥そのままのごって。泥だげあがるどごで。量はあがねばってこれだあ楽だわげさ。やっこい泥はこれでや。ツヂいぐなればヘギさ入ってる泥はみなこういぐカダまるどごでこれ（スコップ改造エビ）で掘りやしはんでや。」

イビカ　堰の幅が狭いときには、陸からイビカ（写真右から4番目の道具）を使用して堰掘りをした。――「セギ、狭いどごだば、オガにいで、これはオガにいでセギ掘る。」

タヂ・サンボンカ　タヂで田のクロにキズをつけるほか、田面にキズをつけてクロばらいをおこなってから、サンボンカ（写真右から3番目の道具）で田打ちをおこなった。田にキズを付けなければ、サンボンカが効率よく入らなかった。この道具は、旧木造町林（はやし）の木村という鍛冶屋で作って貰ったものである。――「鍛冶屋って特殊だもの作る鍛冶屋ってあったもんだいな。うんこのタヂでも。うん。この作った鍛冶屋はなも木造の、大畑（おおばだ、地名）ってすどごの。林（はやし、地名）だねな。そごの鍛冶屋は木村って、今だばねえべおん。うん。ちょんどあの、林の小学校の近ぐであった。これクロはらうのにこう、こう、クロのながこうキズ付けるわげ。してムガシは田んぼどクロの間キズつければ、キズつければあの、クロがらツヂ離れねえわげ。たどごで田さ入る前にこれでずっとこう最初のキズつけだもだね。田んぼさの。クロばらいクロばらいってや。うん。ただクロばり払うんでねや田んぼさキズつけねばこのサンボンカで田打ってもカッパカッパど入ねわげや。うん。」

引っかける道具（トビなど）　サルケに加え、山から柴を拾う権利を共同で購入して燃料の足しにした。「山どこ」の村（山に近く木材の手に入りやすい地域）では、木が豊富にあるため、柴などには目もくれないのだという。柴を拾う場所のことを「山どごで捨てだ山」とB氏は語る。つまり「山どこ」の村の残滓を低湿地に住む人々はさらいに行ったという意味である。柴を拾う際、邪魔になる丸太の移動に用いたのがこの道具である。B氏によるとB家で祖父の代から100年近くにも使われた古い道具だといい、タヂ同様、旧木造町林にあった木村という鍛冶屋で作ってもらったものだという。これを使えば、どのような丸太でも動かすことができた。――「それ、木。今でも山どごさ行げばあるけども、山、あのたどえばあの、伐採したあど残った枝どが、そごの山、枝ある山ごど炭のナガさ入れで焚ぐに、ジャッパ木、うん。山ひとつで買るわげ。1枚とが2枚とがで。それ、2～3人で買って、山さ行ってこんだ、サルケのナガさ入れで木へれば、あの熱みいいどごで。それでこだこれぐれの木あれば、こどこだ、これ

持って行って、山の木えのがす(動かす)に。これやればよ、どった大きい丸太でもえのがすにいいもんだだな。で山どごさいげばもっといいものあるんだ。(当時はサルケだけではなくて)ナガさ木かってへだんだ。枝、山の枝、あの、丸太採ったあどの山、ジャッパある山ごど、お金出して買って、2～3人で。そっからこんだ山二つぐらい越えで、みなしてそったり(背負ったり)曳いだりして持って来て、へでサルケのナガさ入れで焚ぐ。」「うん、ジャッパ木買る、山買るわげさ。(山を買うというのは)山どごで捨てだ山こんだ(じゃっぱ木を拾う権利を)。それタキギに出ぎるどごで。何人が組んで山ひとつ買ってまるわげさ。それみんなでこんだ、分げでこんだはごんで来るわげさ。中里とが金木の山さ行って。これまださ、貴重だもんだね。これだば100年にもなるべおん。オエの孫…祖父の時代からあったもんだどごで。うん。鍛冶屋って特殊だもの作る鍛冶屋ってあったもんだいな。うんこのタヂでも。うん。この作った鍛冶屋はなも木造の、大畑(おおばだ、地名)ってすどごの。林(はやし、地名)だねな。そごの鍛冶屋は木村って、今だばねえべおん。うん。ちょんどあの、林の小学校の近ぐであった。」(2018年7月1取材)

③ C氏 昭和21年生(72歳) 男性

居住の経緯　当地で生まれ育った。

呼称　サルケと称した。――「(泥炭のことを)サルケって(呼んだ)。」

使用年代　C氏の家では周辺の家々に比べて「遅くまで」(昭和37～38年ころまで)使用していたという。明治45年生まれの父親が「健在だったので」、すなわちサルケを使う暮らしに慣れた人がいたことが、遅くまで使いつづけた理由だろうとC氏は考えている。――「ウヂで、おせえほだべおん。最後までオジチャ、チヂオヤやってさ。」「(サルケを使用していたのは)うーとねえ、十六七ぐらいまで(昭和37-38年頃まで)だべがあ。だいたい高校、うう。それぐれえまで、ウヂで採ってやったったんだ。ウヂでイヂバン、アレだね、最後ジイチャンそしてやったもんだどごで(私の)ツヅオヤ。」「ウヂでホントにおごぐまでサルケ焚いだほだべおん。ジサマ健在であったどごでさ。(父は)明治…明治生まれだ。明治45年であったがな。」

定義・分布・質　サルケは、ヨシなどの植物が枯れた「草の根」であるという。神田橋の南方に湿地帯が広がっていて、そこにはヨシなどのさまざまな植物が生えており、その下が「草の根」つまり泥炭になっているとC氏は語る。――「あの、みな上のほう、田んぼの、あそこに橋(神田橋)あるべ。橋の下のほうみな泥炭地帯だったども、神田橋の。ケッキョグ、草の根。いろんなホラ、枯れだヨシとが、そういうな草の、根だわげよ。それはたんであの、草あの、湿地地帯みたぐなってあったわげよ。な。その湿地地帯っていうのは下がみな、ほら、上がヨシとが、いろんな草が生えで、その下が、あの、その草の根だわげよ。たんでその、下の、根が、泥炭だってわげ。」

入手法　田から自家用に採取した。――「(サルケは)まんだ田んぼなってないどご、湿地地帯の、田んぼになってないどごがら、採ってくる(のである)。」

採取の目的　田地の開発にともない採掘したサルケを、「ただ捨ててしまうのではもったいないから」燃料にしたとC氏は語る。つまり、サルケの採取は、燃料と田地の開発との比重でいえば、後者が主目的であった。――「その泥炭採ったあどさ、こうツヂ入れだり、だんだんにホラ。そしてそれを田んぼにズメンの田んぼにしいために、そのサルケを泥炭を、採ただね。(ヤヂからサルケを採り)田んぼにして。」「(燃料と田地の開発とどちらに比重が)田んぼにするためだべ。そのためにただ捨てるのもったいねえがら、それを乾がして、燃料にしたってことなんだべな。」

採取の時期・場所・主体　秋遅くから冬ころになって採取したのではないかとC氏は考えている(記憶は確かでない)。まだ田になっていない湿地から採取した。ほとんどC氏の父親(明治45年生まれ)が一人でおこなっており、女性の関与については、記憶が確かでない。また、切る作業そのものについては、C氏自身(子ども)の関与はなかった。ただし、C氏も運搬を手伝った。――「田んぼの、田んぼはあの、もう田んぼなってしまてるはんでアレだけども、まんだ田んぼなってないどご、湿地地帯の、田んぼになってないどごがら、採ってくる。何月だべな、わあ、あの、冬、アギごろなってがらだべな。春からだばほらあ、田ぼつぐねばなんねどごで、田んぼさあの、シゴド、手加えで、たんで田んぼ終わってがらだんでアギ遅ぐなってがらだべが。採るにの。」「最後までオジチャ、チヂオヤやってさ。」「(掘るのは)ほとんとオドゴの人だな。(女の人は)うーん。ウヂの場合だば、どんだだべなあ。いてあただべなあ。ほどんとオエのチヂオヤふとりやたた感じだねな。な。うん。(私自身は手伝いなど)やらながったね。ま、はごぶだば、手づだいに行ったばって」

採取法　名前は忘れたが、刃に柄のついた道具でタテヨコ25×30㎝に切れ目を入れた。その後、クワのような道具を下から水平に切り入れ、厚さ10㎝程度に取った。この10㎝という厚さは、掘り採ったのちの裁断サイズではなく、掘り採る際の厚みであることをC氏に確認した。それを3段ほど切ったという。ただし子どものころのことであり、記憶があいまいである。――「こう、切っての。いやあ、何ちゅうだべなあ、ムガシのすあ、ムガシの、何ていうんだべなあ、こう、こうなったさ、こうこごに刃ついで、こごさ柄ついで、それでこう、柄さ刺して、して、切るわげ。シカグにの。25㎝に30㎝ぐらいの、カグ(角)だな。厚さはねえ、だいたい10㎝、あるがないがだな。このぐらいの厚さで。(掘る時の厚さ)うん。それでこうキズつけでいってさ、それがら、その厚さをとるためにさ、こだ、まだ違う道具使って、こう下がらこう切るだね、それでこう、7～8㎝、10㎝ぐらいの、厚さでやるったねな。あの今のクワみたいな感じの。こうやるみたいだもんな。何段、三段ぐらいだべがあ。三段ぐらいに切ってあったたべなあ。」

乾燥・運搬・保管　採った場所の近くで、風通しがよくなるよう、「俵を積むように」互い違いに三角形に重ねて乾燥させた。乾

燥すると5個ほどをナワでまとめ、秋のうちか、一冬越してからか記憶が確かでないが、馬で運んだ。乾燥しても、厚みはさほど変わらなかった（縮まない）という。――「へで切ってさ、切ったヤヅごど、あの、三角みたいにさ、俵積むみたいに、三角に、こう、あの、風が入りやすいようにして、それを、こう積んで、乾がすわげさ。乾がさねあまねどごで。その採たガワリさほら。うん。積んでおいで。それで水気も取れるどごで。うん。たって乾がしてさ、そしてで、あれアギ、春さなってがらだべがあ。アギうぢに、アギうぢに持ってきてあったべ春さなってがらだべがな。」「うん。あのあだりまあ、馬だはんで、な。うん。（縄でまとめることは）やった。こう、5個がそれをさ、そのシカグだやづを5個が何ぼでさ、重ねでさ。縄でからがいで。からがいでの。で。」「（乾燥したものの厚さは）だいたい、何ぼも厚さはヘラねえよ。ただ水分ぬげるだげで。うん。（採るときの厚みと）そんなかわらない。」

用途　採暖に用いた。当初はイロリで焚いた。盛りあげるようにして火を付け、ツルベにナベを吊るし、炊事もおこなった。時代が下り、大きなストーブを購入したが、やはりサルケを燃料として用いた。当時は焚き物に不自由していたので、カヤやワラを炊事の燃料にした。その理由を「山どご（山に近い村）でないから」だとC氏は語る。経済的余裕のある家では、マキを買って焚いていただろうとC氏は考えている。――「（そし）て持って（来て）、ウヂの、暖房のカリョグに使って。」「（当初はイロリだったが）それがらあの、最後に、たっきゃ、大きいストーブあの、注文したたんだがどんだが知らねばって、ストーブさなって、入れでの。てやったんだ。ま当初だばただイロリさへでこう、盛り上げで火つけで、してあの、ツルベていうがあの、アレさの。アレさナベカマやって。うん。（炊飯も）うん。」「うーん、そご焚ぐものってそんなにながったべな。カヤでほら、ご飯炊いだり。ムガシ、カマドの。アレさ、カマ、あの、そのカヤだのいっぱい生えであったどごでや。カヤ刈って来て、カヤでカマドさ火、燃料にしてやったり、藁焚いたり。そえんたことしてあったんだべおんんむがしな。うん。うんまそれはあるな。ま、こご山どごでねえどごで。ま、カネあるふとは、あの、あれだべおん。来買って来てすつぁ。マギ買ってきて焚いだりしてあったんだべおん、とうずだばな。」

操作　サルケの火の操作については直接語られることはなかった。しかし、炊事にはサルケのほかにカヤやワラを用いたという証言（前項）から、燃料の使い分けによってさまざまな火力を演出していたことが窺える。

副産物　煙とニオイが充満して大変だったという。ニオイは独特のものがあったが、周囲はみな同じ生活環境だったので、問題化することはなかった。灰の処置については覚えていない。――「煙大変だな。大変であった。独特なニオイしてな。ニオイと煙。充満して。（ニオイのことを言われたりしたことは）それはねえ。みなそうぃえんた感じで。みなムガシらあ。そうえんた感じで。そて使って来たもんだどごで。うん、灰は出るな。あの灰どうしゃったんだべなあ…。灰の処置…、灰の処置どうしたったんだべ。ワぁキオグねえな。」（2018年月7月1日取材）

④ D氏 昭和8年生(85歳) 男性

⑤ E氏 昭和6年生(87歳) 男性

居住の経緯　D・E氏ともに当地で生まれ育った。

呼称　サルケと称した。

使用年代　D・E氏ともにサルケを掘った経験がある。E氏は25～6歳ころつまり昭和31～2年ころまでおこなった。D氏も同じころまで掘ったという。サルケを焚かなくなってからは、木炭を焚いた。――E氏「（実際に掘った経験は）おーーう（ある）。」D氏「オラだづは昭和の人間だどごで、うん。」E氏「掘ったごだあ。」D氏「何歳まで、なんぼぐれあやねな。田、サルケ焚いだだばな。うん。サルケたがねぐなってがらこだ、木、木炭、たいだであな。」E氏「あれ、何歳ぐらいまでだ」D氏「何歳ぐらいまでだ、たげやった。」E氏「たいげえやった。うん。」D氏「オラだきゃまっとやったあ。」E氏「ふふふ（笑）おう、そうだもの。オラハダヂぐらいで、ちょどあの、やたもんだんで25～6までやったんでねえな。」D氏「たげやっただねな」E氏「たげやた！（生まれは昭和）6年！うん。」D氏「（生まれは）昭和、8年。」E氏「4年だべ。」D氏「8年や。」E氏「あはははは、ワ、…」D氏「なに、なにぃ！ピンとしゃべなが！昭和8年生まれや」E氏「ワより2つすぐだろぅ」D氏「ハヂジュウゴ！今現在ハヂジュウゴ！」E氏「（戦後の30年代まで）あーそんだな、そのくらいだやったな。」

定義・分布・質　サルケは「草の根」であり、草がたくさん生える場所に多いという。つまり、サルケは植物に由来する産物であると認識している。その草の根を田の下から採掘したものがサルケである。サルケはある場所とない場所があり、また深さも30～40㎝のところもあれば、そうでないところもあり、場所によって異なった。機械で整備してしまった現在は、まったくなくなってしまったと語る。D氏は「サルケによって、品種によって、良いものもあるし、良くないものもある。草の根ばかりのサルケは燃えやすいが早くなくなってしまう。幾分土まじりのものであれば、長く、熱さもよかった」と語る。サルケの差異を説明する際に「品種」ということばを用いたことが印象的であった。――D氏「サルケ？サ、サルケ焚いじゃあどごあるちゃあ？焚いでらってな？焚いでねじゃ。うん。な、な、何だばこりゃ。サルケて。サルケ…サルケだば何だば。もう、ムガシの話だでばな。わがねでぁ。ああ繁田だばて…。うんうんんだ。そうだずや。やたごとはあらあ。やたごとあらばて、うん。やたごとあらばて、それ、調べだって、今だば現在、ねえわげや。アレ草の根だはんでろう。うん。田んぼのナガに、そうらしたっだ、そらさって、田のナガにすさ、草おがった、それ草かった、の根が、サルケになるわげや。うん。田んぼのツヂの下な。してツヂわんつか掘ってすさ、の下、乾燥さへで、うん。いとごまに乾いだもんだいな。あの、その田んぼによって、あの、草おがったどごだば、草の根だはんでサルケって。ツヂおげ（多く）あるどごもあるし、ないどごをサルケにしたわげさな。うん。うん。ツヂは、あるこどあるけど、草おがるはんでツヂ

はみなあるでばな。したけども、その草の根をサルケにしたんだはんで。根掘って、あの、あいだ、かわがして。そのサルケ、その場所によって、サルケある、ふけえどごもあし、深いどごもあし、うん。まず。」E氏「サルケ今だばねえでばな」D氏「ね。ねばって、聞ぐだべ。その、サルケと…」E氏「これ、調べでどうなるだ。あああ、その生活が！それだば何ぼもしかへるでゃ！田のサルケはすさ、今だばナンモねでばの、あの…機械で掘ったはんで両ワギ、バッと掘ってまって、サルケはねぐなってまったんだ。ムガシはさ、何cmあらあ、その場所にあるんだ。ああ、あるわげ。」D氏「まあ草おげおがるどごはよげあるんだ」E氏「30センン、が40センぐれでサルケあってったんだ。うん。田んぼ。」D氏「その上のツヂが田んぼだわげ。」D氏「（掘る深さは）その場所によって違うだんだ。」D氏「あるどごもあし、ねえどごもあし。」E氏「（何cmくらいまで掘るか）あー、さ、それは…」D氏「その場所によってな、違う、さまじゃであったいな。」E氏「（サルケの品質の違いは）あるあるある。サルケずものああ、サルケまあ、き、き、こう、うのぉ、切れば、チヂまじゃってる、サルケもあるもだ。そえでも、切てあげることなんてダイジョブだでばな。ダイジョブだばってチヂあるサルケは、チヂあるどがらとるのんて。（いいサルケというのは）いや、サルケだげや。まあこの辺だばほとんといいサルケばりだ。」D氏「ちょっと、そのサルケによってろ、品種によってろ。草の根によって、アレだね。いいずもあるしいぐねずもあるしの。草の根ばりのサルケは、燃えやすし、燃えやすくて、早えぐなぐなるわげだ。いぐらがツヂ混じゃった、あの、つらねばや、あの、燃やしても、長ぐ燃やし、燃やしねだ。長ぐ、熱みが、長ぐ…」E氏「なもなもなも、ツヂあ燃えるもんでねもの。」D氏「燃えるもんでねてしてもさ、草の根で、そのツヂもあっつぐなるわげ。うん。（着火は）たんで、大変でもさ、木の、そうそうコッパでも焼いで、ケさ火つぐまで、燃やひてるわげ。」E氏「そうそうそう。」

入手法　自家所有の田から自家用に採取した。

採取の目的　サルケを無制限に採取することはできなかった。というのも、田から掘ったのちに客土して、稲を植えなければならないからである。客土をしなければ、掘った土を戻してもぬかるみが改善しなかった。機械を使わず、手作業だった。岩木川の近くから馬で運搬して客土した。――E氏「あまり一回にいぢねんに多ぐやられねっきゃていうのはそれさこんだ稲入れで（稲を植えて）、田んぼにしねやまねどごで、な。（客土は）当然さ。客土しねば、あの、まご、客土しない場合は、あげだツヂへでも、のがって（ぬかって）まいだ。だどごで、客土すわげさ。客土は、全面て、ま、全面的つうが今のように機械でやるわげでねえし、手でばりやる、したどごで、さ、うーと、まず、客土は毎年、マ（馬）での。ツヂやカワバダがらさ。」

採取の時期・場所・主体　シロカキの前の時期に自家所有の田から採取をおこなった。サルケを採取した田で、続けて稲作をおこなうからだという。――E氏「いやや、それは、あのさ、田んぼ、やる前に、田んぼさ植える前にやるもんだどごで、うん。田いま、まず、五月まえだどごで、シロカギ前だでばの。早い早い。」D氏「田んぼさかがる前に、そのサルケずものとって、あの、道路さまぐわして乾燥させるわげさ。」

採取法　採取にはタヅと、名前は忘れたがある種の特別な道具を用い、30～40cm、厚さは30cmほどの大きさで、一段分を切り出した。場所によって、サルケの層の上にある表土の厚さが異なるため、掘る深さが異なった。また、採取する広さは、昔の田のサイズ（今よりも小さい）で1枚あたり、2～3分の1程度の範囲であった。深さも広さも少量で留めることには理由があった。E氏は「あまり一度に一年に多く掘ることはできないんです。というのは、その場所に稲を植えて、田にしなければならないからです」と言う。つまり、サルケの採取が田地の改良を兼ねること、またその場で続けて稲作をおこなうこと、この2つの理由から一度に多くとることはしなかったのである。また、上げた土を戻してもぬかるので、岩木川から馬で土を運び客土した。――E氏「そのサルケの、いろんな場所にいぱいあただ。いっぱいあった。（特別な道具は）あるある。さ、それはさ。こえんた、あの、何だ。今の、うー」E氏「30センン、が40センぐれでサルケあってったんだ。うん。田んぼ。」D氏「その上のツヂが田んぼだわげ。」D氏「（掘る深さは）その場所によって違うだんだ。」D氏「あるどごもあし、ねえどごもあし。」E氏「（何cmくらいまで掘るか）あー、さ、それは…」D氏「その場所によってな、違う、さまじゃであったいな。」D氏「タヅ、タヅてしたんでねな」E氏「タヅだな。タヅ。タヂってさ、こういんたものあって。刺して。そして、土をこさやって、その上のツヂが、でこさやって、して下のサルケを、掘って、そして干して（笑）。」D氏「乾がしてな」E氏「乾かして、そして、焚き火さ焚いだもの。」E氏「サルケはさ、そう…んなにねえんだ。オラ見るんだば、サルケはいぐらにもあるように見えるけども、そ、そごまで掘ったごどねえんだな。厚さはさ、やっぱりオラ焚き火さ焚ぐもんだどごで、その程度でさ、このくらいだな。1尺ぐらいだ。い、いやややや。1段。」D氏「人のツカラばりだどごで。機械でねえどごで。タヂてろ。大きい刃って書いで。」E氏「（タテヨコの大きさはは）うー」D氏「それは30センぐれえも40センぐれえも、その場所によってそうひろぐやるどごもあし」E氏「オラま、スト、ストーブでねや焚き火さ焚ぐ、範囲だどごで、まずどのくらいだ。ああ、この、これよりしこし大きいがな。（セメントの）ブロック。幅だばこえんたもんだな。高さはさ、もうしこし高げんだ。うーんと（ブロックひとつと）半分ぐらい、の高さで。まと、まっと高さねえがもしらねえばって。あまり一回にいぢねんにおおぐやられねっきゃていうのはそれさこんだ稲入れで（稲を植えて）、田んぼにしねやまねどごで、な。（客土は）当然さ。客土しねば、あの、まご、客土しない場合は、あげだツヂへでも、のがって（ぬかって）まいだ。だどごで、客土すわげさ。客土は、全面て、ま、全面的つうが今のように機械でやるわげでねえし、手でばりやる、したどごで、さ、うーと、まず、客土は毎年、マ（馬）での。ツヂやカワバダがらさ。」／D氏「（川端から）持って来たり、サルケ採ったあど、の山とかそういう、オガのツヂあるどから、持って来て。とにかぐ短期間のうぢに、まだ稲うえにゃあまねどごで、そういうごどさ。」E氏「（サルケを採る田の面積は）いやいや少々さあ！」D氏「焚ぐばりだ…」E氏「しょ、わんつかだでばな。」D氏「サルケ焚ぐばりのあれだよ。しいりょう（数量）か」E氏「そ、そ、それを

さ、あの、イヂマイの田、たどえば、今だあ100ヅオ（坪）どが1反歩どが2ダンブつぐらいあるでばな、それあムガシだばイヅマイの田、イヅマイの田ってへば、何、何畝あら。そ、それハブ（半分）とが、三分のイヂとがって、して」D氏「へ、生活、冬にや、焚くばりの、しいりょう（数量）しかつぐねえわげや。」

乾燥・運搬・保管　田のクロに積んで乾燥させた。乾燥を促すため、塊と塊の間に隙間をあけ、互い違いに積んだ。風で倒れないように、多くても5～6段にとどめた。その後はひっくり返す作業をつづけ、稲刈り前ころまで天日干しした。乾燥したものはナワで縛り、D氏の場合は人力で背負って道路まで運んだ。その後リヤカーや馬に積み替えて自宅まで運搬した。E氏の場合は、採取場所から近かったこともあり、背負って直接自宅に運搬したという。焚く場所の近くや納屋に積み重ねておき、保管した。こういった一連の作業は男性が中心でおこなったが、女性もしばしば手伝ったという。――D氏「田んぼさかがる前に、そのサルケずものとって、あの、道路さまぐわして乾燥させるわげさ。」E氏「（田のクロに置いた）そうそうそうそうそう。田のクロさこう、ジャックどまいで、ほしてすさ」D氏「して冬までかがれば乾燥すのさ、うんただ」E氏「ただこうこうこう（互い違いに）、こさ、こう。」D氏「ただ置ぐばって、草の根だどごで」E氏「うーとさ、何段もつまねえや。風くれば倒れるもんだどごで。うー、何段ぐれえだあれ」D氏「その田んぼによってさ」E氏「んだ。いやいや、2段や3段でねえ。」D氏「だいま何これ調べるだ」E氏「それをさ、それ（調べる目的はわかったからその話は）いんだ。何段ぐらい積まさるてばおがしい話だけど、その人によって、5～6段だば積むな。うんして完全にたおえないようにしてさ。6段7段つむだば、どどど、でなくてねえんだ。あ、間はあぐでばな必ず。互い違いにこうやるどごで、ここがあぐわげだ。（風通しも）いい。（乾燥させておいておくのは）稲刈り前（まで）だな。」D氏「うん。」E氏「稲刈る前。」D氏「まで、暇なればすさ、うん。」E氏「稲刈り前だってムガシだば、手で刈たもんだどごで、えーんと、何月ころだあれあ。いーと…」D氏「アギまで置ぐ人もあるし、乾がねば」E氏「さまざまだでばの。」D氏「冬さまにある（間に合う）ように、冬焚ぐだはんでさ。」E氏「そうそうそう。ひっくりがえして、こう、積みがさねで、かあがして。」D氏「ウヅの、ウヅさ持って来て、アレだね。乾がひておぐの。」E氏「オナゴも皆てづだただ。てづだたばって、オドゴばりだでばな皆ほとんと。て、てづだる人はてづだった。」D氏「イヤカーでもてきたり、な、馬さつけだり」E氏「それはさ、いろいろあるんだ。あの、ムガシだば、田んぼのあの、あるぐどごも、このくらいの幅だんだ、ネゴもねしと、当時は、アレは何で配ったっきゃ」D氏「ワだば、あの、リヤカー歩ぐだげの幅のどごまで出して来て、そってきて、してリヤカーの…」E氏「そって来たべな」D氏「んだやそってきたや！そして、あの、リヤカーさつけで持って来たり、馬あるふとは、馬さつけで持って来たり」E氏「んであったべなあ。わがねぐなってまったであ（笑）」D氏「うん。幅拾広いどごまで来れば、リヤカーで持って来たり。」E氏「んだんたなあ。オラほだば田んぼつかいどごで、ワ、イ（家）まで持って来たんたキオグあるなあ。」D氏「しょってばり来たべ」E氏「しょって、来ただぎゃあれナニ、ナニあの当時」D氏「（縄で）ゆわえでもてきたりして。乾燥すどごで、軽ぐなっきゃ。うん。」E氏「いやあ、んだんたなあ。縄でもてきたぎゃあ。当時（笑）。（何枚一束ということは）ないないない。ねえな。」D氏「うう、それごそ」E氏「焚ぐ場所さや」D氏「そばのふゅろい（広い）どごさすさ、まいでおぐわげさ。してこだ、倉庫あるふとは倉庫さすすぁ。納屋さ。積んでおいで乾がしてさ。」

用途　サルケは屋内で焚いた。カギノハナにナベをかけて飯炊きその他の調理をおこなった。急激に火を必要とするときには、乾燥させたカヤも併用した。「山どこ」であれば、ほとんど木を使うが、ここは山がないので、サルケばかりを焚いていたのだという。また、飯はカデメシではなく白米を常食したという。――E氏「（採る方法は）どういうって、サルケ専門に、切って焚ぐだでばな。まず、オラムガシだば、サルケの、ストフ、ストフでねや、サルケ焚いだもんだもの。焚き火さ。焚き火で。」D氏「してご飯たいだりしてさ、ご飯たいだりし。」E氏「うん。」D氏「こう、あどごさ、火焚いだら、さ、カギ、さぎ、な。あの、ナベかげる、カギノハナってあって。それさ、したでば。」E氏「今…（それを調べてどうする）、ああ、それキログにノゴシテおぐだべ。ナベ、カギノハナってわがねべえ。そ、それさかげで」D氏「やったず」E氏「（炊飯も）そうそう。まあ今のようには、ああいうふうにすはやねばって、ま、今、ムガシだば、サルケしかねだごどで。」D氏「山どごだば木ばりほとんどだってこごは、イナガはこつは、山ねえどごで、木はたがねっきゃ。サルケばりたいで、そして、にわがに焚ぐどぎは、カヤ、カヤで。やたりして。カヤも使ったわげ。乾燥さへで。」E氏「（飯は）いやいや、ご飯だばさ、白いご飯。」D氏「田んぼつくったフトはな。」

操作　着火は容易でなく、木片などに火をつけ、その火でサルケに下方から着火したという。つまり、木片の上にサルケを上げて火をつけたのである。土混じりのサルケは、土も熱くなった。短時間に火力が必要なときにはカヤを用い、燃料の使い分けをした。――D氏「（焚く場所は）シボドてあの」E氏「シボドで焚ぐわげだでばな。」D氏「下さサルケこうつけでや。燃やして。」D氏「燃えるもんでねてしてもさ、草の根で、そのツヂもあっつぐなるわげ。うん。（着火は）たんで、大変でもさ、木の、そうそうコッパでも焼いで、ケさ火つぐまで、燃やひてるわげ。」E氏「そうそうそう。」D氏「そして、にわがに焚ぐどぎは、カヤ、カヤで。」

副産物　サルケを焚くと非常に煙たかったが、気にしていられなかった。目も痛かったが、誰も痛いという人はいなかった。今も目の故障はない。灰は肥料として田に撒いたり、単に捨てたりした。――E氏「あのあだりだばいぷたくて。煙。おーう。煙にかってなも」D氏「煙なも苦にしてられねでばなさびしてまねじゃあ（笑）。」E氏「（目の痛みは）あるあるある。あるべばって、みな…」D氏「そういうず気にしねえみなそんだどごでさ」E氏「みんな、みんなが、そういうふうにやただ目もべづにわりどもねばて、ま、め、いだがったでばの。いだがったってだも、そういうことはしゃべねし。」E氏「（他に）サルケ（の用途）が。サルケだばぁ…以外だばぁねんたな。以外だあねや。ねずのはさ、サルケ焚ぐごどによっていぶるもんだどごで、したどごでサルケだば焚ぐしかねでばな。」D氏「アグだば、田んぼさ、つらがしたり…」E氏「アグだばさ、こんなにたまねんだ。」D氏「…したもんだただ。」E氏

「いやいやそういう場合もあるばたてそんなにたまねんだ」D氏「灰は、そちゃあ今だけに、ゴミ焼ぎ来るでねでばな、田んぼさやったり。」E氏「なもなも。」D氏「肥料だばなねな。アレだば、滓だば、燃やしたあどだばや、肥料だばなねに。」E氏「そうそうそう。田んぼさ捨てだり、こごださただ捨てだり、ま、当時だばな。うん。」

その他　D氏はサルケについて尋ねられると、最初は知らないといい、今サルケなど使われていないのに調べてどうするのだと疑問に思っていたようだ。E氏も同様だった。しかし趣旨を説明すると、D氏もE氏も非常に詳しく教えて下さった。――D氏「サルケ？サ、サルケ焚いじゃあどごあるちゃあ？焚いでらってな？焚いでねじゃ。うん。な、な、何だばこりゃ。サルケて。サルケ…サルケだば何だば。もう、ムガシの話だでばな。わがねでぁ。ああ繁田だばて…。うんうんんだ。そうだずや。やたごとはあらあ。やたごとあらばて、うん。やたごとあらばて、それ、調べだって、今だば現在、ねえわげや。」(2018年7月1日取材)

⑥ F氏 昭和18年生(75歳) 女性

居住の経緯　昭和37年、19歳のときに穂積から当地へ嫁いだ。その頃はすでに当地(繁田)ではサルケを焚いている家はなかったようだ。下記の内容は話者の出身地である穂積での話である。

呼称　サラケ、サルケと称した。

使用年代　出身地の穂積では昔からサルケを焚いていた。昭和37年に嫁いで来たとき、当地ではすでに使われていなかったが、穂積ではまだ使用している人がいた。――「オラ(出身は)穂積(ほぢみ)。んだ(穂積でもその当時は)焚いでら。うん、。昔はな。うん。うーん。(繁田に嫁いだころは)やってない。そのとぎはいつにサルケはない。焚がないみたい。こさきたどぎは。うん。(嫁いだのは)19(歳)だ。(生まれは昭和)18年。トシわがらいでまったな(笑)。サルケはあってあった。焚いだもだねオラ(穂積の)エにいだあだり。うん。うん。」「うんだ、親がやったんだでばの。オラだばみであだげだ。小さいとき。小学校のあだりだあもしあね。中学校になればやってるみたい。こごさ嫁がえできたとぎも、火焚いであったもの。焚いだ火焚いだ。」

定義・分布・質　サルケといえば、田んぼの話であり、地面にある「根っこ」であるという。このことから、C氏はサルケは田から採るものであり、「根」であると考えていることがわかる。――「サルケ？サルケだば田んぼだでばな。私…はわからない。そういうのは、あったずごどは聞いだけど、年いったふとだばわがる。オラもトシいっちゃあばって、あの、とったずごとばオラやったごとない。うん。んだ。ない。(私は)こっちのちょんど隣村がら来た人だ。したどごで、わがってる。うん。うん。やってら。田んぼがさ、地面がさ、根っこで、そういうサラケがあるだべ。今はさ、あの、チヂふぐべ。あ、入れで、アレだけど、昔はあったみたい。うん。そういうこと。」

入手法　自家で採取して使用した。――「うんだ、親がやったんだでばの。オラだばみであだげだ。小さいとき。」

採取の目的　採取の目的については語られることがなかった。

採取の時期・場所・主体　サルケはF氏の親が田から採取した。F氏自身は子どもだったこともあり、手伝った経験はない。――「んだんだ田んぼがら。田んぼでねばねだね。(手伝いは)しないしない。」「うんだ、親がやったんだでばの。オラだば見であだげだ。」

用途　ストーブでサルケとともにカヤや木を焚いて採暖した。サルケは「ただ暖まる」もので、飯は「焚かれない」ものだと語る。サルケを焚いている火のそばで餅を炙って食べた。灰がたくさんまとわりついたが、たたきつけるようにして灰を落として食べた。――「ご飯(焚くの)はちがる。ストーフで、木焚いでカヤ焚いだり、そうしてやったもんだ。うんへば冬とかって、暖まるだあでば。そういう(ご飯など)のは(サルケは)焚がない。サルケは(ご飯は)炊がえねんたよ。ただ、暖まる、冬さなれば、焚いでるみたい。ほんだほんだ。そういうこと。うんだ、親がやったんだでばの。オラだばみであだげだ。小さいとき。小学校のあだりだあもしあね。中学校になればやってるみたい。こごさ嫁がえできたとぎも、火焚いであったもの。焚いだ火焚いだ。ご飯だば炊がない。ご飯は焚がいねもだね。そのしょばさ、モヅでもあぶって、あの、ゴミいっぺえついでも、こうただすけで(たたきつけて)食べだもんだ。そういうこと。トスいった人だばみんなわがっちゅうね。んんだ。やってただ。」

操作　シボドにサルケを積み上げて火を焚いた。――「ムガシはシボドシボドって、そごさこうそうまいで、やって、で火たいだもんだもの。」

副産物　シボドで焚いたが、煙突がないので煙が大変だった。――「焚いだどぎあ煙が出はってさあ、うん。ほんだよ。冬な。大変でそう、なも煙突もなもやってるんでねえ、たんだこういうおっきい、ムガシはシボドシボドって、そごさこうそうまいで(積み重ねて)、やって、で火焚いだもんだもの。」(2018年7月1日取材)

⑦ G氏 昭和33年生(60歳) 男性

居住の経緯　繁田で生まれ育った。サルケを採取したのは大正11年生まれの父であり、自身は経験がない。

呼称　サルケと称した。――「ま、(名称は)サルケだでばな。」

使用年代　G氏が小学校に入る前、つまり昭和39年よりも前ころまでの話である。――「昭和…30年代ころでねえな。学校さはる前だんで6歳…ぐらいまでうん。昭和33(年生まれ)。」

定義・分布・質　サルケとは、燃料であり暖房用であり、「ストーブの代わり」であるとG氏は考えている。つまり、「ストーブによる

暖房が本来的なもの」であり、サルケは「代用燃料」であるという捉えかたである。昭和30年代なかば生まれの人の認識は、より古い時代の人々の認識と異なることがわかる。――「サルケだでばな。燃料というかあの、暖房用だでばな。ストーブ。ストーブがわりだね。」

入手法　大正11年生まれの父が自ら採取した。

採取の目的　燃料用、暖房用だとG氏は語る。――「ムガシ燃料には使ってだな。（掘る手伝いは）したごとはねえな。燃料さしてな。」「燃料というかあの、暖房用だでばな。ストーブ。ストーブがわりだね。」

採取の時期・場所・主体　付近のヤチ（湿地）からG氏の父が採取した。G氏は手伝ったことがない。――「（掘る手伝いは）したごとはねえな。」「（サルケを採ってきたのは）自分のオヤヅよ。まあ、今、こごら辺のもんだばてな、今田んぼなってまってるね。（手伝いは）したごとね。」

採取法　道具についての記憶は薄い。また、その道具も残っていないので分からない。――「（道具は今は）残っていない。あまりキオグねえな。」

乾燥・運搬・保管　乾燥や運搬については不明である。

用途　マキストーブで暖房用に焚いた。炊事に使用したかは不明である。――「ムガシ燃料には使ってだな。（掘る手伝いは）したごとはねえな。燃料さしてな。」「（当時は）ストーブだよ。（炊飯などの記憶は）ねえな。ああそうえんた（ダルマストーブのような）感じ。」「暖房用だでばな。ストーブ。ストーブがわりだね。」

操作　紙などを火種にして着火したとG氏は想像する。子ども時代のことであり、不明である。――「ただ火は紙とが燃やして、火種にしたりしてつけるどもうよ。」

副産物　煙や臭気については不明である。

その他　G氏は昭和33年生まれであり、当地でサルケが使用されていた時代について、幼少期の記憶としておぼろげながら知る最後の世代である。（2018年7月1日取材）

⑧ H氏 昭和10年生（83歳）男性

居住の経緯　当地で生まれ育った。話中の父は明治40年ころの生まれで、現在生きていると110歳くらいだという。

呼称　サルケと称した。

使用年代　H氏が15歳のころ、すなわち昭和25年ころにはサルケを使っていた。ストーブが使われるようになってからは、マキを使った。――「オラたぢおべでがらだば、しか1～2年も使ったがな。だいたい、ジュウゴ（ゴ：半濁音）ぐらいの時だな。（生まれは昭和）10年。（使っていた時期がいつまでかは）しかどわがんねばってな。」「うん。シトブつかるようになってがらだば（サルケを使わず）マギだよ。」

定義・分布・質　サルケは「草の根」であるという。田の下であればどこにでも豊富にあるものではなく、もともと草が生えていた場所の下にあった。サルケには良いサルケと悪いサルケがあり、前者は堅く、後者は柔らかかった。排水がよいとサルケが堅く締まった。サルケの善し悪しは場所の違いにもよった。――「サルケてあの、草の根みたいなもんだきゃ。」「田んぼの下にもあるよ。」「田んぼの下って、どごだかんだねえよ。はええどぎ、草おえでるどごもあったきゃ。田んぼでねぐ。そういう下にあった。いっぱい、どごでもあるわげでねえんだ。」「（田の改良ということでは）ねえ。田んぼの下とが、そういうとっがらとったんだ。上にチヂこうあるんだもの。その下にあるんだ。（サルケの質の違いは）ううある。良いサルケはこう、かだいの。悪いのはこう、やわいだでばな。うん。場所にもある（よる）べし、したこだ、サルケあても排水いいばサルケ締まってるだべしさ。」

入手法　H氏の父が採取した。

採取の目的　目的は不明である。

採取の時期・場所・主体　採取は春、苗代のあとで田植えの前あたりにおこなった。今のようにゴムナガクツなどがない時代なので、水の冷たさに耐えられるほどに冷たさが緩んでからおこなった。切り取る作業はH氏の父がおこない、H氏が手伝った記憶はないが、運搬については手伝った。――「手伝ったその記憶はねえ。運んだことはあるよ。」「（掘るのは）春。だいたい、まあ、寒ぐなぐなって、水さはい…、あのあだりだば今だけにはぐもののゴムとがトグナガどがああいうものもねえはんで、こうズボはいだなり、はぐんだはんで、したはんで、だいたいしさ、それ我慢すぐらいまでぬぐぐなってがらやる。田植えの前。まず、す、苗代、苗代のあどだぎゃ。」

採取法　「刃に柄のついた大きなクワのような道具」で地面に溝を入れた。次に、表土を「大きいクワのような道具」で除き、すでにサルケを採掘した前列の低くなった場所に落とした。そして、サルケの層に上からタテに長く「目」（切り込み）を入れた。場所にもよるが、幅と深さはおよそ30～40㎝の切り込みである。次に、15㎝ほどの間隔で横にも目を入れた。するとサルケは「カパカパ」と採れた。下面は切らなくとも「サルケは草の根みたいなものだから、すぐ採れる」のだという。――「あのさ、おっきいクワみてのがあって、そして、こう、なった、刃ついだ、こえに柄ついだものがあって、うん。それ、それでこう、こま、このくらいに、あの溝入れでろ、うん。そして、上のチヂを大きいカ（鍬）で、カみたいずで、こうとって、落どして、（上の土の厚みは）その場所によって。うん。（上の土を取り除くと）サルケなって。して、目へ、それはじめ目入れでぐっきゃ。したどごで、こつのほうがらこう

やってやればカパカパどこう取れでいぐ。手でこう、やれば、カパカパど。うん。まあ、す、こうこう、なって、今こごやってるってへば、こうなって、前に切てれば、やってれば、こご低ぐなってサルケあげでるどごで、低ぐなてまてでばな。それを今度次やるとぎは、おっきい、サギにこう、(タテとヨコに)目入れるわげ。そしてその、おっきいカ(鍬)でこの上を、サルケの上の土を、サルケの上の土を、とって、うん。そうえってやると、こぢがら今度採っていげば、か、根入ってるはんで、サルケのこう、カパカパど、にゃ、オラダヂもやったごとはねえけども、見でばりだはで。(タテだけではなく)ああそう(ヨコにも切れ目を)入れる。まあだいたい、そのどぎのやりがだにもよるばって、厚さ(上から見たときの幅)が、目入れるどぎだいたい、このぐれ(約15㎝)も厚いがなこうえんた感じで、目入れでぐきゃ。うん。それで今度目入ってるどごで、今度こぢがらそのサルケ採るに、こぢこう、ま、低いどごで、こう、やればカパカパど、きたて。下は切ない。うん。たんであの、サルケてあの、草の根みたいなもんだきゃ。だんですぐこうてこう。下は切らなくても。うん。(厚さは)その場所によって違る。厚みはが、だいたい、30㎝…30㎝～40㎝ぐらいだべ。採って。」「春。だいたいまあ、寒ぐなぐなって、水さはい…、あのあだりだば今だけにはぐもののゴムとがトグナガどがああいうものもねえはんで、こうズボはいだなり、はぐんだはんで、したはんで、だいたいしさ、それ我慢すぐらいまでぬぐぐなってがらやる。」

乾燥・運搬・保管　隙間をあけるように互い違いに5～6段ほど積み重ね、乾燥中に1～2回ほどひっくり返した。お盆すぎになると、7～8枚ほどをナワで束ね、「ショイコ」で背負って自宅へと運んだ。馬も使用した。H氏は、サルケを切る手伝いをしたことはないが、運ぶ手伝いをした経験がある。家に運んだのち、ムシロのようなものをかけて、雨にあたらないように保管し、冬に使う分を少しずつ持ち出した。――「(サルケの切り出しを)手伝ったその記憶はねえ。運んだことはあるよ。うん。それはあの、何枚かこのくらいまで縄で束ねで、上げればすぐ乾がすはんで、あの、こう、こういうふうにして、段つけでこうやって次ぎこうとがって、あ、ナガこうあげで、次ぎに乾がすの。うん。だな。5～6段も積んだな。して乾がしてナヅ過ぎれ持って来るんだ。(乾燥したら持って来る)うん。一回や二回はひっくり返す。うん。ううそれ(ひっくり返すのを手伝ったこと)はないけど、あのねえばって、見だことはあるよ。だな。7～8枚も…、10枚だばまるがねな。(それを)背負って来るんだ。うん、ムガシあの何だ、稲しょったり、オラだづだば、使ったばってオメだぢだばショイッコってわがらねえべ。え、しょってきて。馬使ったり(も)したよ。その場所にあるはんでな。(ショイコで家まで運ぶこともあるし)うん馬で運ぶことも。」「(乾燥後に運搬するのは)まず、に、お盆その頃だべ。うん。(持って来たあとは)この、盛り、盛りにして、まず、あのあだりだばシートもねえばってしさ。シート(ムシロ)みたいのかげで。雨あだらねえようにしてとってして。冬、しこしずつ使う分だげ。」

用途　H氏はシボドで「暖房用」に焚いたと語る。また、炊事もシボドでサルケを使用したという。夏場はサルケを使わず、稲わらやヨシ、カヤ、木の枝などを用いた。握り飯をサルケの火で温めると、灰だらけになったが、「それでも死なずに今生きているよ」と笑う。ニシン、カドザメ、タラなど海の魚は鰺ヶ沢から、近所ではフナやエビをとってサルケの火で炙って食べた。焼くほかに、煮たり、フナはイズシ(ふなずし＝飯とともに発酵させたもの)にして食べた。「当時は経済的に余裕がなかったので、仕事の合間に堰でフナを釣ったり、エビを網ですくったりして採って食べたよ」とH氏は語る。当時は、ひとすくいでエビが茶碗一杯ぶんも採れたものだという。――「それを乾かして、ムガシはあの、暖房にしたんだよ。」「暖房用に使ったんだ。こういうどごに、こういうナガすきとって、こごに、火つけで暖房にしたんだ。うんシボド。うんうん(炊飯も)そごでやったの。ご飯炊いだりすとぎ、あのムガシは、稲採ったワラあるだろ、アレとが、その辺におえだヨシ。アレを乾がしたりしたのでご飯炊いだんだ。うんサルケそえて使って、うてサルケはすぐにねぐなるに暖房に、使ったわげ。ナヅはサルケ使わね。うん。だんでナヅはご飯炊いだりすとぎは、カヤのアレ乾がしたとが、ああいうもの、ナニ、そぢこぢの、木の枝とが、う、そういうもの焚いでやったんだ。やったらしいよ。オラだぢもしっかどわがんねえばって。」「(サルケの火で握り飯を温めたり)そういって食ったんだよ。その握り飯あ灰いっぱいついでもそれ、食べだんだよ(笑)。それでも死なねで今まで生ぎでらでぁ。サガナでも、やげば、ムガシだば、今、いや今でもにしあだりでも、串さ通して、あぶるうーって、せば、油でるぁ、さがるーどごさそれさ火ついで、ボッポボッポて。まんずあのあだりだば、春獲れだのだば、ニシンさ。や、カドザメとが、それがら、タラすさ、この付近で獲れるではね鰺ヶ沢で。あだりで。う、ニシンあだりでも、今ハダハダあがるとふとづで、ずきで、バットとれればあどいなぐなるはんですさ。(フナを食べたり)ううしたよ。今は食べねえ。フナ、ほう、したんでシゴドねば、この辺の田んぼさつかってるセギさ、うー釣りに行ってとたもの。そなてがらだば、今だばなもサガナねえばって、あのあだりだばろう、みなサガナも、ジェンコ、みなカネねどごで、とった、フナとが、エビとが、とってくったもんだよ。(焼くほかに)煮で。(フナズシも)うんある。エビでも、網ですくってよ、あの、つっとすれば、エビあだりでも茶碗で一回に、茶碗で一杯でも入ったときあったんだよ。そんなにいであったんだ。」

操作　H氏によると、夏場はサルケを燃料として使わず、ワラやカヤ、木の枝などで炊事をしたという(前項)。サルケはもっぱら暖房(採暖)用として考えられていたようだ。燃料を使い分けていたことがわかる。

副産物　まわりが見えなくなるほどの煙が多量に出て大変だったとH氏は語る。とりわけ着火時には、どれほど寒かろうが窓をあけて煙を出したという。当時はそれが原因で多くの人々が目を患ったと考えている。川向こう(岩木川の東側、金木方面)に行くと、サルケを焚かない地域が広がっている。サルケを焚かないのは、サルケがないからである。だから、(嗅ぎ馴れない独特のニオイについて)「サルケカマリする」(サルケ臭い)と言われた。サルケの灰を利用したことはなかった。――「煙は出だよ。あの冬のユギプープーって吹いでる、あのトギでも、煙たいがら、窓あげでユギ入ってきたもんだよ。ふふふ(笑)。うん。したて、全然もの見えなぐなるだげ、(窓を)閉めでまって(いると)サルケの煙で(大変でした)。うん。目あのあだりはずんぶ悪ぐ

したよみな。ナボさびたて、窓あげで煙出したもんだ。オラだぢそうサルケで暮らしていだの何年もでねえはんで（それほど大変だったという記憶はない）。それがら今度マギなったはんですさ。ニオイもするよ。どういうニオイって、むごのほすさ行げば、ムゴのほうではサルケ焚がねっきゃ。したんでムゴのふとだぢ、ろう、こぢの人だぢあちゃ行げば『サルケカマリす』ってしたもんだよ。ムゴの人はみつ全部、マギだはんですさ。川のむごうのほうは殆どサルケ、あずのほうサルケねんだね。うん（サルケカマリすると言われたことが自分も）あるよ。（灰を利用したことはない）うんうん。」（2018年7月1日取材）

⑨ I氏 昭和10年生(83歳) 男性

居住の経緯　当地で生まれ育った。

呼称　サルケと称した。

使用年代　I氏が国民学校3～5年生ころ、つまり昭和19年～21年ころの話である。――「ワ、戦争前だはんで。戦争の前だはんで、ワ戦争のとぎワちょんど国民学校4年生のとぎだな。おやや。オメだぢにしゃべたたてドテンすやな（笑）。」「まず小学校、あの頃アレだ3年生が4年生が5年生のあだりだなあ。」

定義・分布・質　繁田周辺には馬の草刈り場が広がっていて、ここから北東方向、すなわち下繁田船越方面に行くとカヤが広がる。繁田近辺はサルケが豊富だったが、下繁田方面に向かうに従い、サルケは少なくなる。また、岩木川のほうに行くに従って、土が多くなりサルケが少なくなる傾向があるという。I氏は、サルケが豊富に埋蔵されている場所のことを「サルケが強い」と表現した。その場所にあるコンクリートの壁は、沈下して波打っている状態である。

このあたりのサルケは水分が多く、場所によっては土混じりになっている。サルケには良いサルケと悪いサルケがあった。前者は土が多く混ざっていて、燃えにくいが火持ちが良かった。後者は土が少なく、燃えやすいが火持ちの点で劣った。これらを区別する呼称はなかった。I家では、両方を使用した。――「そんど、そういうもんだげ、みんず、ジャジャーってそしてナガみでれば、ツヅていうどご混じゃてる、して、その場所によってツヂも混じゃってるどごも、あるわげさ。（サルケの良否は）あるあるある。その場所によって。してナンボがツヂ混じゃって、いる場所も、して、サルケ採ってる人もいるわげや。んその、んぁ、ジブだ、ジブだぢのその場所がな。うん。あるだ。（土混じりは質的に）悪いな。悪いな。して、悪いけども、長持ぢはするわげ。焚いででも。へば、その、サル、ツヂねえやづだば、割とツヂねえどごで燃えやすうどごで、早ぐ、こう燃えでしまうわげさ。うん。ちさちょど長持ぢするわげ。（呼び名の区別は）そごまでわがらながったなあ。まず小学校、あの頃アレだ3年生が4年生が5年生のあだりだなあ。（自分のとったサルケは質の良いもの、悪いもの両方）あったな。あったった。（場所によっての違いは）ああある だ。ナンボなってでもツヂ混じゃてる、ツヂがそ、こたでも多いがら草もおがえやすうし、こってなもねだばおがえねんだ。グジャグジャでただ水ばりで。（サルケの質の違いは）まずこの辺でもいろいろと、あるわげや。いろいろとある。あるな。うん。この辺はほとんと、アレだな。オギまで、こう、馬の草刈り場。で向ごうほのほう（北東方向：下繁田船越方面）さ行げば、あの、やっぱりカヤ。して、そごの村さ、シモスギダ（下繁田）って稲垣でイヂバン最後の村、シモシゲダ。んだなあ。あつ（下繁田方面に向かうに従って）はサルケねぐなる。その、ブラグのほづさ行げばな。なるたけこぢのほじさあら、あったわげさ。うん。」（砂積み場にしただけでも）「下がる下がる。サルケつええどごで。」「向ごう（岩木川方面）さ行げばどうえてもツヂ多い、サルケはあるにはあるけどもな。うん多いな。やっぱり最低てへばこの近辺、だな。サルケ採たのな。」

入手法　I家は分家だったので、本家の持つ土地からサルケや馬の草を採らせてもらい、自家用に加え本家の分も納めた。自給用以外に掘ることは殆どなかった。――「（このあたりでサルケを採ったという）うんそうそうそう。でオラダヂだば、あの、オズカマドであったどごで、なもなくてあったどごで、本家、本家て親だぢ生まれだどごろさ、こちゃ、サルケ切に来て、ワダヂ、焚いだもだもの。して、馬の草も、結局、そごの本家ど、のやづ刈ってけでワダヂ採ったりしてやってけだのさ。こいずで冬ず焚ぐやづ貰ったもんだ。」「（自給用以外は）ええん、ほとんどねえ。自分で焚ぐ分な。そしなで焚いで」

採取の目的　目的については語られなかった。

採取の時期・場所・主体　サルケは田植え後、田の草取りも一段落した7～8月頃、お盆前のあたりに切った。「田が忙しいから、田が終わってから」採取するのだという。

繁田の村から300mほど離れた、現在はカヤの繁茂している場所（写真）が当時サルケを掘る場所だった。その場所は100m～200mもある広いエリアで、草はあまり生えておらず、生えていても短かった。カヤは全く生えていなかった。歩くと、「グジャグジャ」と水が出て来て、地面が「ドファドファ」と揺れた。田は土が厚くサルケの採取に適さないが、その場所（ヤチ）は表土が薄く、表層近くにサルケが現れていたので、採取が容易であった。順序としては、サルケを採る前に馬のシクサを採り、その後サルケを採取した。

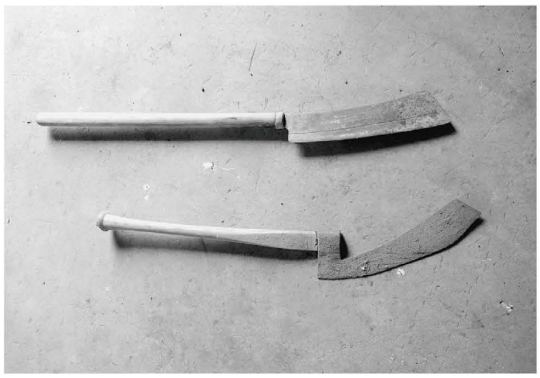
かつてサルケを採取した場所

サルケを切る場所して定められた村の共有地があり、そのなかに、およその各家のエリアが定められていた。毎年サルケを切る場所を

決めておき、その場所をほかの目的に使用することはなかった。経済的に苦しいときには、サルケやシクサを採る権利を売る人もいた。金木の蒔田（まきた）や神原などほかの地域から来て、その権利を買う人もあった。金木方面には木が豊富だがヤチが少ないので、その目的はサルケよりも、シクサであった。

サルケを切り取る作業の中心は主に本家の兄弟（伯父と父）で、母親も手伝った（次項参照）。切る作業をI氏は手伝ったことはなかったが、それ以外の作業は手伝った。――「おぁ。この辺も、田んぼであったな。てさ、これはムガシ、よっぽど前にってあったな。そしてムガシその、そごに、ウツの田んぼもあってったんだね。圃場で整備す前に。であこさネギ植えでらべ。あの近辺、あの、してこの辺にもう、サルケは、田にはあったけども、あの、薄くて、採れないわげ。ツヅがあまり厚いがら、採れないわげ。田んぼには丁度いいどもってムガシは採ったんだべおん。この辺はな。うん（表層が）厚がっただ。（上の土が厚いのでサルケの層まで到達するのが大変だった）そうそうそう、そうらしんたな。そして、その辺がら、道路あるべ、こっち。じっと、んだなあ。これがらこう、300メーターばり行げば、道路あるけども、あの、おっきい排水あるけども、その辺こぢ、ほとんとだな。おうおう。そしてさ、この辺は、そのサルケ、掘にいしてあったけども、この、なんちゅうが、カヤわがってるが。カヤ、カヤってあこさおがってるカヤだけども、あの辺、あの、も、おがってあったわげよ。なでそういうどごおがって、そのサルケど少ねぐぇがど思ってムガシのことだけどワシ考えだわげよ。それき、ホガの人さ考えだってわがねし年行った人さ聞いだわげよ。したきゃ、サルケのどごあグジャグジャて水入ってあの、草ばりだどごで、それは馬にかせるわげ。そのサルケ採ったどごは。サルケ採る前の（生えている草）な。馬にかせる草。それ、そういうカヤおがってるどごは、もう少し向ごうだけども、そさこんどカヤおがってあったんだ。カヤ。まんず1メーターも3メーターもあるくらいの。あの、カヤってや、あらあらあら。あこまで行って見るけどもや。ああいうずおがるわげさ。して、そごだり近所、馬もあまり、あさ、歩がねえわげ。オラがらしゃべれば。（サルケが掘りやすかった）そうそうそう。（逆に）田んぼのどごな。（土の量が）多いがらな。（馬の草をとる場所は表土が）薄ってまあ、ツヅってツヅねえな。（表面からすでにサルケのような）そうそうそう。そうそう。してその（馬の草を）干したやづが、冬に食べさせる。さぎに、そういうどごはシクサ。してその（シクサを採った）あどが、サルケ採ったり、サルケ採るどごはそのし、かげのどごあシクサ刈る、その、そごも、あるけども、その、サルケ採るどご（サルケを採る場所として定められた場所）が、あこサルケあるわげ。そうそうだいたいそ、あたえんたな。そうして考えでみれば。あるだな。うん。いやいや、（その場所は）村のもん（共有地）であったな。村のもの。村のもんでも、その、だいたい自分のどごが、だいたい区域あるわげ。区域があったな。そして、オカネないだりすれば、売ったりす人も、して旅がら来て（ほうぼうの集落から来て）、あの、買ったりした人もいるな。そのシクサが欲しいがら。馬にかせる草。農家だがらすぶと、ねえはんでさ。そうそうそう。金木（かなぎ）のほうで。金木のあの、橋（神田橋）あるべ、金木の蒔田（まきた：旧金木町）だとがってし、金木のあるんだ。蒔田だとか神原（かんばら：旧金木町。岩木川左岸の広須組・木造新田の村々と金木組・金木新田の村々を結ぶ重要な渡し場があった[37]。現在はその上流に神田橋が架かる。）だとがそういう人。その（そこの）人だぢ来たな。うん。（金木のほうにヤチが）ないないない。」「して、その、そのあだりサルケってへば、して、こう、草ながながおえねえわげや。みちけえ草こで。して、カヤ、やあカヤって分がってらべ（笑）カヤだのて全然生えねえどごだわげさ。そして、こして歩げば、ぐじゃぐじゃって水ではてきて、して、こうドフアドフアてすわげ。おう、してすあ、して、まあ、広いはんでな100メートルも200メートルもある場所だはんで」「タヅ、タヅ。おあ！あるじゃ！同じだばって、これイヂバン古しいやづ。（右のタヂ）これは、田んぼに、畦畔。畦畔あるべ。今だあ機械で切るばって、フチこう切ったの。（田のクロ）そうそうそうそう。これはな。これ（左）はもどもどの、あの、ヤヂだな。（サルケ切りにも）使ったな。して、これも。あの、畦畔切るにも使った。（サルケを切るのは）田植え後だな、田植え後ってばす、（田の草取りも一段落して）7ガヅ、8ガヅ頃だな。8月、盆前だな。うん。その、田んぼの、なんちゅうが、田の草とったり、ムガシは手でこうして、あの、その、やってまればその後、切ったもんだ。（田植え後にするのは）それが、あの、田んぼが忙しいがら草やねば草おがってしまるがら、田んぼのほぢやってしまってがら。」「この辺（北緯40.924東経140.405）はムガシから田んぼであったんだ。ま、今だば圃場整備して、こうきれいにこう、なってるけども。この辺は田んぼであったけども、この辺もサルケはあるな。この辺もサルケは。（サルケを掘る主体は）そうそうそう、みなオドゴ。オドゴだな。（手伝ったことは）うー、それまではやないけども、運んだだば運んだな。」

採取法　まずタヂで切れ目を入れる。縦長に30cmほどの間隔で3本ほどの7～8mほどの切り込みを入れ、横も30cmほどの間隔で5本ほどの切り込みを入れた。次に、20cmほどある表土をクワで「ヒュッ」と取り去った。このクワはサルケを切る専用の道具である。一般的なクワよりも刃が広幅で、長いものであった。柄は長くなく少し湾曲していた。I氏は長年保管していたが、1年ほど前に五所川原の人から展示に使いたいと言われ、あげてしまった。そのため、実物はない。続いて、表土の下にあらわれたサルケの層を20cmほどの厚さ（深さ）に切り上げた。切り上げられたサルケは、30cm×30cm×20cmのサイズである。2段掘った。I氏の家では、サルケ掘りにテンズキは使用せず、タヂとクワでおこなった。I氏は、テンズキはベテランの人でなければ曲がってしまって使いこなせないという。



I氏所有のタヂ2種